
最強の英雄、ハルケギニアの大地に立つ

コロコロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の英雄、ハルケギニアの大地に立つ

【Nコード】

N7464K

【作者名】

ココココ

【あらすじ】

英雄と称えられることなく果てた男がいた。男は、蘇り、英雄と称えられる者の命を狙う。だが、英雄を目指す少年に阻止され、その身を散らす。

男は恨んだ。男は憎んだ。その少年を。その執念はやがて世界を超える。

そして出会う。一人の少女に。森でひっそりと暮らす、心優しい少女に。

殺戮と破壊を生み出す男は、双月が浮かぶその世界で何を見出すのか。

【初の二次創作です。キーワードは『ぼくのカンガエタっこいいバルバトス』】

< 1 > (前書き)

どうも、コロコロです。コメディ作家やっております。

さて、今回は本編そつちのけで書いちゃいました。初の二次創作！
！ それも他作品クロス！！ そして主役はあのアナゴで有名なバルバトス様！！ 俺の大好きキャラ！！！！

ですが……これはあくまで『ぼくのカンガエタかつこいいバルバトス』とあるように、バルバトスを美化した小説です。「こんなバル様とちゃう！」と言う人がいれば、出来る限り読まない方がいいと思われます。まあ読んでみないとわからないと思いますが。後独自解釈があります。そこら辺もどうかご容赦を。

まとにかく！ 初めての二次創作です。正直緊張しますが、どうぞご入場ください！

では皆様！ レッツ・ぶるああああああ……！！！！！！

「ぐおおおおおおおおおっ！！！！」

とある世界。その世界の空に浮かぶ大地に幾つか建つ建造物の中で、最も巨大かつ中央にある建造物、名を『ダイクロフト』の内部。そのこの中枢の部屋、四本の剣が突き刺さっている強烈なエネルギーを発する巨大な水晶体の前で、男は胸から脇腹にかけて大きく斜めに切り裂かれ、猛獣のような雄叫びを上げ、膝を着いた。

「もうどこにも逃げ場はない！ 覚悟しろ、バルバトス！！」

男の前に立つ、ツンツンした金髪をした活発そうな少年が、剣を男に向ける。彼の周りには、銀髪の長身の長柄の斧を握る青年、長剣と短剣を持った獣の頭蓋骨を被った少年、赤髪を二つに結んだ弓に矢をつがえている女性、派手な杖を持つピンクの髪をした少女、そして先ほどの少女の物より装飾が少ない杖を持つピンクのワンピースを着た少女が立っていた。

全員ポロボロになりながらも、その目からは何者にも屈しない、強い意志を感じられる。対峙する男は、そんな彼らを狂気と怒りを宿した目で睨み付けるが、傷口から流れ出る夥しい出血によって体内の血が失われ始め、満身創痍の状態になっていた。

「ク、ククク……覚悟しろ、だと？ 貴様のような小僧が、俺を、倒す、だとお！？」

ゆっくりと、緩慢な動きで立ち上がり、左手に持った禍々しい巨大

な戦斧を振るい、男は残された力を振り絞って叫ぶ。

「誰も！ 俺は、倒せない！ ……倒せないのだあああああつ！
！！！」

【バツ！】

その巨体から似合わない素早さで飛び上がり、男は巨大な水晶の上に降り立った。水晶から流れ出る力に当てられ、男の体力はさらに消耗していく。

「バ、バルバトス！」

「勘違いするなよ、カイル！ 俺は、貴様に倒されたのではない！
！」

カイル、と呼ばれた少年が男の名を呼び、男は水晶の上から少年達を見下ろし、嘲笑った。その間にも、傷口からさらに血が流れ出て、水晶の上を赤く染める。

「俺は、俺の手で、死を選ぶ！！ フッフ…アーツハツハツハ！！
！」

それでも男は笑う。高らかに、狂氣的に。

その中に僅かな悲しみ、悔しさが含まれているのを感じ取れる者は、誰もいなかった。

「ま、待て！ バルバトスつ！！！」

「ぐうううう……！！！」

少年が叫ぶ。男は唸る。水晶体のエネルギーを浴び、男の体は白く輝きだす。

(クク……許さん……許さんぞカイル・デュナミス……！)

意識が薄れ始める中、男は徐々に白く染まっていく視界に少年の姿が入り、強く、そして深い憎しみの念を抱く。

(かならず……かならずいつか、貴様の下に舞い戻ってくるぞ……
そして、この手で……。)

意識が消える。体の力も消えていく。

(貴様を！ 八つ裂きにしてくれるううう……！！！！！！)

そして、

「ううう おおおおあああああああああああああつっつ
……………」

断末魔の雄叫びを上げた男の体は、ガラス細工のように砕け、四散した。

天地戦争時代、地上軍側を裏切り、天上軍へ寝返ろうとした男がいた。その動機はハッキリしないが、地上軍の中将であったディムロス・ティンバーに対して劣等感を抱いていたゆえの行動だという説が一番有力であるとされていた。

結果、天地戦争時代ではそのディムロスによって処刑され、とある人物によって蘇った彼は、英雄という名を持つ者に深い怨みを抱いて行動するも、その英雄の息子によって再び処刑されてしまった。

その者の名は、バルバトス・ゲーティア……『英雄』の力を持つていながら、『英雄』と称えられることなく果てた者。

漆黒の闇が浮かぶ、深い森の中。月の明りも届かない静寂の闇。獣も寝静まり、唯一聞こえる声は梟の静かな鳴き声のみ。

「ぐ、おおおつ……………！」

だが、その闇の中で野太い男の声が響き渡った。普段は気にも止めないような草に触れる音と擦る音も妙に残る。やがて、声の主は柔らかい草の感触を感じながら、呻き声を上げて立ち上がった。

「はあ、はあ……ゴフツ………ここは……。」

屈強な肉体に、紫を基調とした服を着、若草色のマントを羽織った水色の髪の子……バルバトスは、彼を知る者がいれば珍しいと言われる程、戸惑いの表情を浮かべた。

自分は先ほど、英雄の息子とその仲間達と激闘を繰り広げ、負け、そして巨大なレンズである『神の眼』のエネルギーに触れて砕け散り、死んだはずだった。

なのに何故か肉体がある。感覚がある。一体全体、どうなっている。

「……ククク……これは、神の思し召し、という奴かもしれんなあ……。」

だがバルバトスにとって、そんな理由はどうでもいい。彼は信じてもない神に、今回だけは感謝してやろうと思い、同時に喜びが身を包み込んだ。

今、彼の中にあるのは復讐心。自分をこんな目に合わせたあのガキを八つ裂きにすることのみ。それだけが彼の中に生きる意欲を湧かせたのだった。それに比べれば、自分が何故生きているのかなんて

いう疑問など、彼にとってはその辺の蟻並にどうでもよかった。

「待っているおカイル……この俺が、再び貴様に引導を渡してやるわあああ……。」

凶悪な笑みを浮かべ、バルバトスは一步足を踏み出した。

「！ゴフっ！！」

だが、その足はさらに先に出ることなく再びその場で膝を着くことになる。

彼は生き返った喜びによつてすっかり忘れてしまっていた。先ほどの戦いによつてできた、胸に大きな裂傷のことを。

血は先ほどより収まっているが、それは彼の中の血液が大量に消費されたということであつて、今の彼は満身創痍の状態から全く変わっていない。寧ろ悪化しているといつてもいいくらいだった。

しかも自覚覚悟で『神の眼』のエネルギーに直接接触したのだ。あそこで体が砕け散つたのはおぼろげながら理解できたが、何故か生きている。だがその身に浴びたエネルギーの残留はまだ体の中に残っていた。ダメージの全てが無かつたことになるというのは、さすがに虫がいい話だ。

それでも倒れないのは、元から彼の中にあつた並外れた体力と、その体を支配している執念のおかげである。

「フ、フフフ……やはり、そう簡単に事はうまくいかんかああ……。」

咳き込んだ時に口から出た血を拭い取り、バルバトスは怪我のことを忘れてしまつていたことに自嘲した。

この程度の怪我、手当てさえすればどうとでもなる。カイルを殺すことはひとまず後回しにして、今は体を万全の状態に整える必要がある。

そう判断したバルバトスは、休める場所を探すために、大量出血によって疲労した体を引きずるようにその場を後にした。

「クソが……何もないのかここには……。」

歩き始めて十分。バルバトスは、忌々しげに呟いた。

暗い森から抜け出すことができず、未だに彼は彷徨い続けている。

そもそもここが一体どこなのかさえ把握しておらず、地理などもつての他。時代さえわかればどうにかなるかもしれないが、それを把握するための手段さえない。

体力もすでに限界に近く、今倒れてもおかしくはない。だが彼は、こんなところで死ぬ気など毛頭なかった。

（せつかく手に入れた命だあ……こんなところで再び無くしては、俺の無念は晴れることなどおない……！）

内心焦りつつ、バルバトスは残された体力を使ってできるだけ急いで森を抜けることに専念しだした。

そして、それからさらに数分経った時だった。

「……………むう？」

歩き始めてどれだけ経ったかわからなくなり始めた頃、バルバトス

は目の前の先から森が切れているのを視認した。再び歩き出すと、暗い森から脱出することに成功した。

さらに、出た場所は開けた場所で、そこに小屋がいくつか建っていた。小屋からはいくつか気配を感じるができるが、壁にある窓から明りがない限り、全員就寝しているのだろう。バルバトスは捜し求めていた場所をようやく発見し、笑みを浮かべた。

「てこずらせやがってえ……まあいい。」

彼は早速、小屋へと足を向ける。

中にいる人間どもを皆殺しにしてから傷の手当をするのが得策だが、生憎今の体の状態ではあまり負担はかけたくない。できるだけ起こさず、いただく物（食料等）はいただいてからとっとと退散するとして、もし万が一見つかった場合は、そいつを……。

いろいろと思案に暮れながら、バルバトスは一番近くにあった小屋の扉に手を伸ばした。

「……ん。」

ウェストウッド村の一つの家。その一室で、ティファニアは寝返りを打った後、目を開いた。

飾り気のない、質素な部屋。必要最低限の物しか置いていない、月明かりで照らされた自室が、覚醒したばかりのぼやけた視界に写った。

「……………」

やがて彼女は再びベッドの上で上に向いた後、目を閉じて眠ろうと試みる。だが、中途半端に覚醒してしまった頭は冴えてしまい、眠ろうにも眠れなかった。

「……………眠れない……………」

ポツリと呟き、ティファニアはゆっくりと上体を起こした。同時に、流れるようなプラチナプロンドが月明かりの中で揺れて煌き、傍から見れば幻想的な光景を生み出した。

（やっぱり、午後にお昼寝しすぎたのが悪かったのかな…？）

ぼんやりとした頭で目が冴えてる理由を探すも、それで眠くなることもなく、仕方なく彼女は寝巻き姿のままベッドを抜け、床に置いてあったスリッパを履いて立ち上がった。

（お水でも飲もうかな…。）

少し喉が渴いたので、ベッドの傍にある台の上にあるランプに明りをつけ、台所へ向かうために扉を開けて部屋を出る。真夜中なので、音をたてないようになるべく忍び足で廊下を歩く。そして台所に続く道を曲がろうとした。

【ガタツ】

(!?)

物音がし、ティファニアは足を止める。突然のことに体が硬直し、胸の中に不安が沸き起こった。

「…………マ、マチルダ姉さん…………？」

ティファニアは、先日仕事を一段落終えて村に帰ってきた姉の名を小声で呼んでみる。だが反応はなく、また何かを漁る音がした。

「ジャック？ ……それともエマ？」

今度は一緒に住んでいる子供達の名を呼んでみる。だが、それでも返答はなかった。

誰かが自分と同じように眠れずに、台所を漁るといふならばわかるけれど、返事がないのを確認すると、小さかった不安はさらに大きくなる。

泥棒だろうか？ それなら、姉を起こして来ようかと思うが、今呼びに行けば物音をたててバレてしまう可能性もある。できれば騒ぎを大きくして子供達を不安にさせたくない。

オマケにいつも持ち歩いている杖も部屋に置いてきてしまった。これでは、いつも使っている魔法が使えない。

今のティファニアには、対抗する手段がない…………仕方なく、手近にあった箒を手にした。ないよりマシ、という考えの下である。

そして、さっきよりもゆっくりとした忍び足で歩き、そっと壁越しに台所の様子を見てみる。

台所の、普段食料を保存してる場所で何かが動いているのが見えた。周りに明りもない状態のせいで、影が動いているようだった。

ただ、その影がとてつもなく大柄だというのが離れていてもわかった。

ティファニアは正体が掴めない何かに、恐怖を覚えた。だが、みすみすここで逃して生活していくのに欠かせない食料を食い荒らされるは大変困る。ここは気付かれないように、慎重に近づいて相手の頭を殴って気絶させ、その後部屋にある杖を取りに行ってからいつもの同じ魔法を使うしか方法がない。

そつと決まれば早速実行しようと、そつと足を一步踏み出して、

「誰だ貴様は？」

瞬間、凍りついた。

「え、あ……。」

突如、聞きなれない声を聞いてティファニアは声を上げることができなかった。しかし、それは忘れていたのではなく、声を上げることができなかったせいだった。

その声には、相手を圧倒するような威圧感が込められていた。一般の戦闘慣れしている戦士でも、この声を聞いた瞬間、愚か者のように立ち尽くすだろう。ましてや戦闘など、縁もゆかりもないティファニアは、それだけで頭の中が真っ白になった。

声の主と思われる影が、ゆっくりと大きくなっていく。否、相手は台所で蹲っていたようで、立ち上がったというのが正しい。ただでさえ姿勢を低くしている状態で大柄だと判断できたが、立ち上げればその身長は天上につかんばんかりの高さだった。

「チツ、見つからないようにはしていたが……見つかってしまったものはあ仕方がない……。」

その大柄な体に似合う、野太い男の声。その声の主が、ゆっくりと自身に近づいてくるのをティファニアはただ見つめていた。

やがて、手に持つランプの明りによって、その全貌が露わになってきた。

声だけでも恐怖を抱いたが、その姿もそれ相応の迫力があつた。ティファニアなど、腰の辺りまでしか届かないその巨大な体。ピッチリとした紫の服が包むのは、その体を構成している逞しい筋肉。ランプの明りが完全に届かないせいで、元々凶悪な笑みを浮かべている顔に影がついてさらに凶悪に見える。並の人間であれば、この時点ですでに卒倒してるに違いない。だが、ティファニアはもっと別のところに目を向けていた。

胸から脇腹にかけての深い切り傷を見て、ティファニアは息を呑んだのだった。

「クク……悪いがなあ、お嬢さん。こんな夜更けに、起きてきた己の身を呪うんだなあ……。」

ゆっくりと、男はティファニアの首にそのティファニアの顔ほどもある大きな手を伸ばす。その手で少し力を入れれば、ティファニアのような細かい首など、木の枝を折るに等しい。

ティファニアは男の怪我にずっと気を取られていたが、自らに迫る命の危機にようやく気付くと、後ろに飛び退こうとした。

「グッ………！」

「……え？」

【ドスンッ】

だが、間もなく男は苦しげな呻き声を上げると、手を伸ばした状態のまま両膝を着き、思い石を落としたような音をたてて木製の床の上に倒れこんだ。

「……え？ あ、あれ？」

ティファニアは、突然男が倒れたことにより、状況についていけずに頭が混乱し始めた。だが少し落ち着いてくると、目の前で倒れた男の状態に気がつき、慌ててしゃがみこんだ。

「あ、あの！ 大丈夫ですか！？」

必死に男を揺らすティファニアだったが、僅かに息をしているだけ

で微動だにしない男を見て、先ほどの怪我を思い出した。

「大変……すぐに寝かせないと！」

だが男の体は細身のティファニアには、この男の巨大といえる体を支えるのは無理がある。やむ終えず彼女は、自分の姉が眠る部屋へ走っていった。

「……………ウグ……………」

小鳥の囀りが耳に入り、バルバトスは重たい瞼を開く。しかし、突然目の中に眩しい光が飛び込んできて、再び目を細めて右手で光を遮った。

「チツ……………俺としたことが、あんなところでバテることになるとはなあ……………」

舌打ちし、家の住民らしき娘に見つかってしまったって始末しようとした瞬間、今までどうにか持ちこたえてきた体力が完全に底を尽き、倒れこんでしまった自分の身を呪った。あんな醜態を、脆弱な小娘如きに曝け出してしまったのだ。元々プライドの高いバルバトス本人にしてみれば、屈辱以外の何物でもない。

「まあいい……後で殺してしまえば、済む話よあ……。」

やがてそれはいつもの獰猛な笑みへと変わる。元々、姿を見られたからには生かしておく必要などどこにもない。

くぐもった笑いを浮かべたバルバトスだったが、ふと自らに置かれた状況を再確認した。

(……どこだあ、ここは…?)

自分は今寝ている。それに間違いはない。

だが場所がわからない。見上げれば、木製の天井。横を向けば、タンスや机など、生活に必要な最低限の家具しか置かれていない質素な部屋。先ほどの光は、窓から差し込んでくる日の光だったようだ。

そして今寝ている場所は、柔らかいベッドの上だということ。

(どうなっている……?)

何故、自分はこんなところで寝ているのか。それは、自分が何故生きていたのかという状況よりももっと不可解な疑問だった。

あそこで倒れてから記憶がないが……もしかして、あの時殺そうとした少女がここまで運んだというのだろうか？

否、それはありえないだろう。何故自分を殺そうとした人間を、わざわざ助けるような真似をするのだ。そんな奴は奇特な人間か、相当なお人よし。あるいは平和ボケをした奴くらいだ。

だが、いくら考えても埒があかない。今はとりあえずこの不可解な状況を打破することに専念しよう。

その前に、バルバトスはふと頭に何故か浮かんだ言葉を呟いた。

「…………知らない天井だ…………。」

元ネタは聞かないで。

【ガチャッ】

「あ…………。」

「むう？」

扉が開く音がし、バルバトスは目をそちらに向けた。

部屋の入り口の前で、美しい金色の髪の少女が、こちらを見て硬直しているのが見えた。若草色の薄手のワンピースを着、その白い肌を強調させ、清楚さを醸し出している。耳元を覆うように被った大きな白い帽子と、スラリと伸びた白い足に履かれた白いサンダルという素朴な格好も、少女の可憐な姿に合っている。

だが、バルバトスはそんな少女の美貌などに目もくれず、別のことを考えていた。

（この小娘、確かあの時の…………なるほどなあ…………。）

バルバトスは先ほどの推理を思い出し、内心ほくそ笑んだ。この少

女が自分を助けたのなら、奇特な人物か単なるお人よし、あるいは平和ボケなのだろう。少女がここにいる時点で、ここは自分が忍び込んだ家に違いない

「え、えつと……お、お目覚めになられたんですね？ あの、大丈夫……ですか？」

おずおずと、バルバトスの風貌に怯えながらも歩み寄ってくる少女を、バルバトスはニヤリと笑った。

「貴様かあ……この俺をここまで運び込んだのはあ……。」

その言葉には、『自分自身を殺そうとした人間をご丁寧に手当てしたバカ』という意味も含まれていた。

だが、少女にはそれが伝わらず、しどろもどろに答える。

「は、はい。その、ひどい怪我をしていたので……でも、運んだのは私じゃなくつて、えつと。」

「私が運んだのさ。」

そんな少女の後ろから、少女より背が高い長い緑色の髪をした女性が現れて言った。鋭い目つきに、シャープな顔立ち。気の強そうな顔と高い身長は、誰から見ても美人と写るだろう。

だが、全身から警戒のオーラがバリバリ出ているせいで近寄りがたい雰囲気を出してしまっている。先ほどの言葉も、どこか棘がある

物言いだった。その視線の先は当然、バルバトスだった。

「ホオ……小娘二人揃って俺を助けるとはあ、随分と酔狂な奴らだなあ……。」

「…勘違いすんじゃないよ。私はこの子、テファに頼まれたから仕方なくアンタを運んでやったんだ。そんなガタイのよすぎる体をした奴、私が見つけてたら速攻家から叩き出してくれるところだったよ。」

「マ、マチルダ姉さん…。」

嘲るように言うバルバトスにマチルダと呼ばれた女性は吐き捨てるように言い放ち、少女ことティファニアは嗜めるようにマチルダを抑えた。

(まあ、理由はそれだけじゃないんだけどねえ……。)

マチルダは、改めてバルバトスを見る。彼女が、ティファニアの頼みを渋った理由は、単に彼の見た目だけではない。その体から漏れ出る、圧倒的な威圧感と殺気。飢えた猛獣のような狂気を帯びた目。

そして何より、体のあちこちに染み込んでいるであろう血の臭い。

ティファニアを含んだ家族皆に内緒で今まで数多くの修羅場を潜り抜けてきたマチルダは、そういつた荒事関係にはとにかく鋭いのだ。最初に夜中に叩き起こされて、寝ぼけ眼のまま倒れたバルバトスを見た瞬間、その眠気が吹っ飛んだくらいだった。それほどまでに、この男から湧き出る力は強力な物だった。

そしてそれは、決していい物ではない。ましてや血の臭いは、人を、それも大勢の人間を殺していないと付かない物だ。ゆえにこの男が、雰囲気と風貌、そして長年の勘からして危険人物だと、マチルダは

脳内で警鐘を鳴らし続けていた。

オマケに殺してきた人間の中に、メイジが混じっているとしたら……こいつは相手馴れなメイジ殺しということになる。下手に手は出せない。

第一、何故夜中に家のだ真ん中で倒れていたのかも気になる。それはティファニアからも聞いていないが、それはこれから聞き出していくことにする。どのような手を使ってでも。

「……それで？ アンタは何で家の中で倒れていたんだい？」

未だ警戒を解かず、マチルダはバルバトスへと歩み寄る。決して無防備ではなく、バルバトスが手を出してきた瞬間、いつでも殺せるように自分の得物を懐に隠している。そんなマチルダに、ティファニアはおろおろする。

そんなマチルダを、バルバトスは相変わらずベッドに横になったままニヤニヤと笑いながら見る。

「クククッ………それを知ったところで、貴様には関係がないだろう

……。」
「……アンタ、自分の立場わかってないようだね？」

バルバトスの態度に膨れ上がる苛立ちを隠しながら、マチルダは平静を装う。

「今のアンタは完全無防備なんだよ？ その気になれば、私が今、この場でアンタの喉を掻っ切つてやることだってできるのさ。アンタが倒れてた場所が場所だけに、こっちは警戒するに越したことな

いからね。」

「はっ！ この俺を殺す、だと？ バカも休み休み言え。貴様如きに、この俺は殺せんよお……！」

「……だったら試してやるうじやないか？」

挑戦的なバルバトスに、マチルダは堪忍袋の尾が切れたらしく、静かに懐から自身の得物である杖を抜いた。

それを見たティファニアは、慌てて彼女の腰にしがみついて止める。

「ね、姉さんやめて！ お願い！」

「放しなテファ！ こんな怪しい上に危ない男、生かしておくわけにはいかないんだよ！」

「フハハハッ！ 言ったはずだ！ 貴様如きで俺は殺せん！ 第一なんだその棒つきは！ そんなもので俺を殺せるだとお？

ふざけるのも大概にしるよ貴様あ！」

「ふざけてんのはアンタだろうが！ メイジ怒らせたらどうなるか、今この場で教えてやるからさあ……！」

先ほどの冷静な考えはどこかへ吹き飛んだらしく、杖を手にとって暴れだすマチルダ。少なくともティファニアの手前、殺しはしないが、せめて地獄に行く方が幸せだったと思わせれるような痛覚を与えてやるうと思っていた。今のこの男の状態ならばそれくらいできるとマチルダは踏んだ。

ティファニアはそれを必死に押しとどめた。

「姉さん落ち着いて！ 落ち着いて……あ。」

暴れるマチルダを抑える揺れで、ティファニアが被っていた帽子が落ち、流れる金髪の全てが露わになった。

同時に、ピンと尖った耳も姿を現した。

「あ……！」

「む？」

それを見たマチルダは内心「しまった！」と己の迂闊さを呪って冷静になり、バルバトスはティファニアの耳を見て疑問符を浮かべた。部屋は険悪な空気から、一瞬にして気まずい空気に……大して変わっていないが、言うなれば騒がしかった部屋が一転して静寂に包まれてしまった。

ティファニアは帽子が落ちたことにより自身の耳が露わになり、慌ててその耳を両手で覆って隠す。だがすでにバルバトスに見られているので、それに意味はなかった。

「え、えつと……これは、その……。」

頬を桃色に染めながら先ほどより慌てふためくティファニアを、バルバトスは怪訝な目で見る。そして、マチルダは冷静さを取り戻し、だが警戒心はさらに強くなり、杖を持つ手に力を入れた。

「あ、あの、危害を加えるつもりはありませんから……心配、しないでください。」

耳を抑えながら不安げにバルバトスを見るティファニア。バルバトスはその言葉の意味が理解できなかった。

「……何のことだあ？」

「「……え？」」

バルバトスが疑問の声を上げると、逆にティファニアが、そして何故かマチルダまでもがキョトンとした。

「……あ、あの……恐く、ないんですか？ この耳を見て……？」

「……何だと？」

おずおずと聞くティファニアだったが、その言葉はバルバトスの機嫌を損ねることになる。

「貴様あ……俺が貴様のような軟弱な小娘一人に、怯えるとも思つたのかあああ？ ……随分と嘗めてくれるじゃあねえかあ……！」

「え！？ いえ、そんなつもりじゃ……！ た、ただ……。」

怒らせるつもりなど全くなかったティファニアは、何故バルバトスが怒ったのか理解できなかった。

だが少なくとも、この耳を見て怯えていることはない。それだけでティファニアはどこか安堵していた。

「ただ……なんだあ……？」

対し、バルバトスは自分を下に見られたような気分になって内心怒っていた。こんな見た目からして軟弱な少女に恐くないかと聞かれてプライドをさらに傷つけられたのだ。バルバトスからしてみれば、体が万全であるならば、『ワールドデストロイヤー』ぶっ放してこの森ごと消し去ってもいいくらいだ。

「ただ……エルフを見て恐がらない人なんて、初めてだったから……」

「…。」

「……何い？」

「はい……混ざり物、ですけど。」

聞きなれない単語を耳にし、バルバトスは溜まっていた怒りが散っていきのを感じた。エルフという言葉は、自身が知る限り幼稚な物語に出てくる妖精の名前だったはず。だが実在しているわけではなく、それはあくまで御伽噺に出てくる生き物のはずだ。

だがこの少女は自身をエルフといった。実在しないはずの妖精だとこの少女は言っているのだ。

それも『混ざり物』と自嘲気味に呟いたのを聞き、バルバトスは疑問に思った。

「……おい、幾つか聞かせてもらうがあ……。」

「は、はい。何でしょう？」

相変わらず威圧感たっぷりの口調だが、その言葉に怒りはないと判断したティファニアはホッとした。

「一体全体、ここはどこなんだあ？ セインガルドか？ ……フィッツガルドかあ？」

バルバトスは、自分が知る国名を挙げてみる。彼は天地戦争時代の人間だが、蘇った後に様々な国、様々な時代を渡り歩いてきたので、そついった地理には若干明るい。

「？ セインガルド……フィッツガルド？ ですか？ ええつと、聞いたことないですけど、ここはアルビオンのサウスゴータ地方にある、ウェストウッド村という小さな村ですけど……。」

だが、ティファニアから飛び出してきた言葉に、バルバトスはまたしても聞きなれない単語に悩む。アルビオン？ サウスゴータ地方？ どれも聞いたことがない。

「…マチルダ姉さん、セインガルドっていう国、知ってる？」

「悪いけど、全く聞き覚えがないねえ。アルビオンにトリスティン、クルデンホルク、ガリア、ロマリア、ゲルマニア……………私が知っている国名は、こんくらいさね。ハルケギニア中のどこにもそんな国はないと思うね。」

「……………ならば、天地戦争は知っているか？」

「天地戦争？ なんだいそりゃ？」

聞きなれない国名、あの有名な天地戦争のことを知らない……………バルバトスは、嫌な予感に襲われる。

「……………ならば、さらに聞くがあ……………」

その後、バルバトスはいろいろとティファニアとマチルダから聞き出した。

ここはハルケギニアという大地で、そこに先ほどマチルダが述べた国があるということと、このアルビオンは空に浮かぶ一つの大陸ということ。そしてこの世界にはメイジという魔法を行使する者達がいる、それらのほとんどは貴族という土地を治める者であり、魔法が使えず貴族に従う者を一括して平民と呼ぶ等の階級制度。そして東に住んでいると言われているエルフ達は先住魔法と呼ばれる力を使ってハルケギニアの住民達に恐れられているということなど。さらにティファニアは、そのエルフと人間との間にできた子供だということも教わった。

ドラゴンやグリフォンなどの幻獣がいるという辺りはバルバトスが知っている場所と同様だが、他に晶術やレンズといった一般知識を彼女達が知らないというのがわかると、バルバトスは一つの結論を導き出した。

（まさかあ……俺がいた世界のどの時代にも属さない、全くの別の世界だとはなあ……。）

時代を渡り歩く力は持つていても、世界を超える力などは持つていないバルバトス。だが、仮説を立てるとしたら、あの『神の眼』に触れたことよって発生したエネルギーが原因なのかもしれない。ダイクロフトを浮かせ、空中都市の土台となる地殻を生み出す程の力を持ったレンズだ。世界を超えてしまうのも不可能ではないかもしれない。

では自分はその時、死んだのではなくこの世界に飛ばされた、と考えるのが妥当だろうか？ いやしかしそれはあくまで仮定であるから……。

普段使わない頭を使うバルバトスの頭から白い煙のような物が見え始めたのを他所に、マチルダはバルバトスとは違う仮説を立てた。

「アンタ、もしかして東方ロバ・アル・カリイェから来たのかい？」

「……ロバ、なんだと？」

またしても意味不明な単語を聞き、バルバトスは思案を止めた。

「東方だよ東方。ハルケギニアの住民でさえ知らない、東の果ての土地。アンタはそこから来たんじゃないかってね。知らない国名に知らないワード。十分、ありえるんじゃないかい？」

なるほど、未知の土地から来たというのなら違和感はない。だが、それなら全世界を巻き込んだあの天地戦争を知らないという時点でその説はないだろう。

しかしバルバトスはそれを否定しなかった。何故なら、これ以上ややこしい話をするのはバルバトス自身耐えられなかった。元々戦いにしか興味がなかったバルバトスだけに、脳味噌はある意味筋肉だった。先ほどまでの仮説を立てるまでに頭を使ったこともある意味奇跡である。

「…生憎、俺は気がついたら森の中で倒れていてなあ……東方だのなんだのは知らねえぜ。」

「は？ どういうことだいそりゃ？」

「そいつは俺が知りたいことだあ……だから説明なんぞできん。」

しかし、これはバルバトスにとってはある意味死活問題だった。生活云々ではない、宿敵でもあるカイルがいない世界に飛ばされたとあっては、帰還するもの容易ではないだろう。神の眼ほどのエネルギーを持つ物体があれば何とかなるかもしれないが、そう易々と見づかりはしない。

最初に生きていたという喜びもあって、そのダメージはでかい。バルバトスは一気に絶望に突き落とされた気分になった。

（一刻も早く連中に復讐しなければならねえという時に、なんてえ様だ……。）

だが、いつまでも落ち込んでなどいられない。早く元の世界に戻り、自分をここまで追い詰め、絶望に追いやった連中を切り刻まなければならぬのだ。こんなところで油を売っている暇などない。

「あ、あの……。」「
「ああ？」

ティファニアがおずおずと聞いてきて、バルバトスはぶっきらぼうに言い返す。

だが、次の言葉にさすがのバルバトスも正直戸惑った。

「あの、体の具合が治るまで、ここにいませんか？」

「テファ！？」

「…何だとお？」

ティファニアの突然の『ここにいませんか？』宣言に、バルバトスだけでなくマチルダまでもが目を見開いて驚いた。

「えっと、実はあなたの体のことなんですけど、胸にあった大きな傷は塞ぐことができたのですが…。」

ティファニアの言葉にバルバトスは体に被せていたシーツを捲り、自分の胸元を見る。そこには、服が斜めに切り裂かれ、血によって変色しているものの、そこから見えるバルバトス特有の黒ずんだ肌が見えていた。あれだけの大きな傷が完治されていたのだ。驚かないのがおかしい。

「……これが貴様の魔法とやらか？」

「いえ、それはこの指輪に込められた力を使って。」

ティファニアは手を上げて、その繊細な指の収まっている青い宝石が付いた指輪を見せた。指輪にはエルフの使う先住の力が宿っていて、大きな怪我でも治すことができるのだ。

「けれど、衰弱自体は治せなかったんです。これには、傷を塞ぐ力しかないから……。」

「ほお……。」

随分便利なアイテムだとバルバトスは思った。もつとも、アイテムを使うことを嫌うバルバトスは本来なら毛嫌いするところだったが、死んでもおかしくない怪我を治したのだ。そこら辺は賞賛に値する。

最も、元いた世界にも『グミ』や『オベロナミンシリーズ』、『ライフボトル』なる怪我や瀕死状態から回復する薬品が店に普通に売っていたが、アイテム嫌いの彼からしたらそんなもの知ったこっちゃない。

「ですから、そんな体だと危ないですし……元気になるまで、ここで一緒に暮らせば……。」

「テファ、アンタ何言ってるんだい!？」

邪気がまったくくない笑顔で言うティファニアをマチルダは制止する。

マチルダからしてみれば、この男は本当に危険だ。先ほどティファニアが耳を隠しながら恐ろしいかと思われた瞬間、バルバトスから漏れ出した殺気を感じ、内心冷や汗をかいた。今まであそこまで背筋を冷やしたことはない。この男は、自分以上の血生臭い所にいたとい

うことを物語っていた。

そんな奴を家に置いておくなど、冗談ではない。いつティファニア達に牙を向けるか、わかったもんじゃなかった。この時ばかり、マチルダは自分の妹の純粹かつ無警戒っぷりを憎らしく思えてしまった。

「クククク……ハーツハツハツハツハ！！！」

だが突然、バルバトスが高らかに笑い出し、ティファニアとマチルダはビクリと肩を震わせた。

「クハハ……まあたく、飛んだお人よし、いや、間抜けな女だあ……わざわざ自分が殺されかけた相手に『一緒に暮らしませんか』等という奴は初めてみたぜえ。」

バルバトスから出た言葉に完全に彼を敵と見なしたマチルダは、無言で杖を引き抜いて突きつけようとした。

「いいだろう。その提案、乗ってやるわあ。」

「なっ!?!」

だが、バルバトスがティファニアの提案に乗った瞬間、マチルダは開いた口が塞がらなかった。

バルバトス自身、こんな小娘の世話になるなんて気に食わなかったが、今のこの体は神の眼の力を浴びて正直調子が出ない。今のこの

状態では、あの時よりもっと強くなったカイル達を相手にするには力不足は否めないと判断した。

それに比べれば、この小娘の下で力を蓄えていくことなど不満はあれど苦痛は感じない。別に療養するのであれば場所は問わないが、ここは未知の世界で唯一見つけた絶好の療養所だ。これを使わない手はない。

幸い、彼の体ならば、神の眼の力は強大であれど、数週間かすれば完全に力を取り戻せるだろう。その後に、用済みとなったこの小娘など、生かすも殺すも自由にすればいいだけの話。

「だがあ、俺は雑用など一切せんぞお？ それに万が一、俺の機嫌を損ねるようなことをすればあ……速攻責様を殺す。」

「……………はい、構いません。ですけど、私以外の子供達には、手を出さないでください。」

「フン、それは俺の気分次第よお。」

「ちょ、アンタ達……！」

マチルダを放置して会話はトントン拍子に決まっていく。あまりに穢れを知らないティファニアに、マチルダはちよつとマジで拳骨を落とすそうになった。

「じゃあ、まずは自己紹介ですね。私は、ティファニアと言います。」

ニコッと笑うティファニアに、マチルダは頭痛を感じ始めた頭を押えた。

「ホラ、姉さんも。」

「……………マチルダ。」

ティファニアに促され、マチルダも渋々と自身の名前だけを言った。こうなったらティファニアを止めるのは無理だろう。だがマチルダは別に妥協したわけではない。大事な妹を殺そうとした男など絶対に信用などしない彼女は、もしバルバトスが怪しいと感じた時点で魔法で心臓を貫く決意を固めた。

「俺の名はあ、バルバトス・ゲーティア……短い間だがあ、よろしく頼むぜえ？」

ニヤリと笑い、明らか心から言っていない言葉を吐くバルバトスに、ティファニアは笑みを崩さなかった。

「はい、よろしく願いますね、バルバトスさん。」

「…フン………ところでアンタ。」

ふとマチルダは気になっていたことを聞くことにした。

「何だ。」

「まだ起き上がれないのかい？ それほどまでに衰弱してたってこと？」

言い忘れていたが、バルバトスは会話中ずっとベッドで横になっていたのだ。顔だけティファニア達に向け、体は動かさないうでいた。そこまで体力が切れていたのだろうか？

「……ああ、これかあ。」

だがそうではなく実は、

「体がベッドにめり込んでしまっただけねえのよおう。」
「……………」

数多くの戦場で血を流してきた男も、時に抜け出せない状況に陥ることがある。木製の古いベッドを壊した体重82キロのバルバトスは、それを痛感したのであった。

数十分後

「さ、朝食にしましょう。」

そう言ったティファニアは、木製のテーブルの上に朝食を並べていく。マチルダはまだ眠っている子供達を起こしに家を出た。

村全体が孤児院なため、それぞれ一軒ずつに子供達三人が暮らしているが、食事を取る場合は基本的にティファニアが暮らしている家へと子供達は集まってくるのだ。

そして、起きたばかりでまだ眠気のある子供達は次々とテーブルにつく。そこから、和やかな朝の団欒が始まる。それがいつも通りの

朝。

だが、今日は“いつも”通りではなかった。

「……………」
『……………』

ベッドから抜け出ることに成功した男、バルバトスが、そのガタイのいい体を存分に発揮して三人分の席を占領して腕を組んで威圧感たっぷり座っている（大きめのイスがなんかギシギシいつてる）のを見た子供達は眠気が吹っ飛んでしまい、戸惑い、怯えていたからだ。中には泣き出す子もいた。

それに傷つくバルバトスではなかったが……正直、気まずい。

「え、えつと、この人はバルバトスさんって言って、昨日の夜中に倒れていたのを見つけて、怪我は治ったけどまだ衰弱している状態だから、完全に治るまでここで皆とすごすことになったの。」

その空気に耐えられなかったティファニアは、慌てて新参者であるバルバトスの紹介を始める。だが『今日からすごす』と聞いた瞬間、子供達は凍り付いて逆効果になった。

「えつと、その……………とりあえず、仲良くしてね？」
『……………』

ティファニアが言うも完全に硬直した子供達に、マチルダは「ダメだこりゃ」と呟いたとかなんとか。

「フン、仲良くだとう？ 俺は軟弱者どもと馴れ合うつもりなどないわあ……。」

オマケにバルバトス特有の地獄から響くような低い声によって泣く子も黙って震えだす始末。「本格的にダメだこりゃ」とマチルダは呟いたとかなんとか。

「……さ、さあ冷めないうちに食べましょう。ね？」

気を取り直して、ティファニアが優しく言ってから朝食を取ることにした。子供達もティファニアの声で少しだけ落ち着いたのか、怯えつつもスプーンを手に取る。普段なら賑やかな朝の団欒も、一人の男によってぶち壊しになってしまった。

そしてそうさせた張本人であるバルバトスは目の前に並べられた朝食を見る。野菜のスープに色鮮やかなサラダ、そしてフカフカのパン。最もポピュラーな朝の献立である。

「……………」

だが、今まで戦いに明け暮れていたバルバトスにとって朝食という物は時間の無駄以外何物でもなかった。それだけでなく、彼にとって食事という概念はとうに消えうせていた。天地戦争時代ならそれなりの物は食べていた記憶があるが、それはもう千年以上も前の話だ。

というわけで、バルバトスはさっさと終わらせるべくある意味物凄い手段を取ることにした。

おもむろにスープの椀を持ち上げ、そして、

【ゴッ、ゴッ、ゴッ、ゴッ……ゴクン】

スプーンを使わず、一気に飲み干した。それはもう、さながら会社帰りのサラリーマンが仕事終わりにこの一杯！と言わんばかりにビールを一気に飲み干すような豪快さ。

【バリバリ、ゴクッ】

さらにサラダもスープと同じように持ち上げて全部口に放り込んでから軽く咀嚼して飲み込み、

【バクリ、ゴクッ】

パンに関してはその柔らかさを堪能することなく完全丸飲みして誰よりも早く食事は終了した。

マナー云々以前に、体に悪い食べ方であることは間違いなかった。

『……………。』

そしてそのある意味豪快さを絵に描いたような食べっぷりを見た全員が唾然とした。ティファニアはもとより、全員が子供であるために、こういったあまりにも粗暴な食べ方をする人間を見たことない

彼女達にとって、インパクトがありすぎた。

「……………貴様ら、何を見ている…………？」

「！　な、何でもないです！！！」

じーっと見つめられているのが気に障ったらしく、ジロリとティファニアを睨むと、全員慌てて食事を再開した。始終バルバトスの異様な風貌に子供達はずっと怯えっぱなしであったせいで、ティファニアのお手製の朝食の味があまりしなかったという。

こんな感じで、バルバトスの奇妙な生活が幕を開けたのだった……………。

バルバトスがこのハルケギニアに来て初日の晩。村の者全員が寝静まった頃に、バルバトスは一人、家の外で空を見上げて立っていた。別にこれは趣味ではない。彼の趣味は、ただ戦うことのみ。それ以外にない。

だが、空を見上げたバルバトスの目には、どこか感慨深い物が浮かんでいた。

「……………まさか本当に違う世界とはな……………」

バルバトスの視線の先にある物。それは、星が散りばめられた漆黒の空の中を悠然と大地を見下ろしている、赤と青の“二つ”の月。元の世界には、月は一つのみ。どこの大地にも、月が二つ見える場所などない。空に浮かぶ二つの月は、まさにここが異世界だということを示しているかのようだった。

それを見て、バルバトスは確信を得て再び絶望を感じた。だがそれは一瞬のことで、すぐに体の奥底から湧き出る感情に自然と震えた。

その震えは他でもない、歓喜。見知らぬ世界、そして未知の魔法。自身のあの傷をも治せるほどの強力な力が、この世界にはある。すなわち、それほどの力を持つ者がこの世界にはいる、ということ。先ほどまで絶望を感じていたとは思えないほど、その身を喜びが包むのだ。

(俺が殺すべき敵はカイル・デュナミスに変わりはない……………があ……………この世界は、もしかしたら俺の渴きを多少は満たせれるやもしれ……………ん……………)

最終目標はカイルを殺すこと。バルバトスの決意は、いや、執念はとにかく深いのだ。だが、この世界にカイル・デュナミスという人間はいない。似てるような奴がいるとは思うが、それは自分が殺す人間ではない。

だが、もしそんな人間や……それだけでなく、魔法の扱いに長けた戦士がいるというならば、そいつらと戦うことがあると思うと思わず体が疼く。

「……ハルケギニアよ……。」

誰も言うわけでもなく、獰猛な笑みを浮かべながら小さく呟いた。

「その魔法とやらの力でえ……俺の渴きを、満たしてみせえええい……！！」

自分が元の世界に帰るまでに。この殺意を、この世界はどこまで発散させてくれるのか……バルバトスは、未だ得体の知れないこの世界に、大きな期待を寄せるのであった。

翌朝。前回と同じような、異様な雰囲気の中でバルバトスは朝食を食べるといふより丸飲みして先に席を立ち、外に出た（この村の扉よりもバルバトスの方が大きかったため、少し屈んで出る必要があった）。ティファニアには、自分は雑用などは一切しないと約束し

ているし、第一バルバトス自身、村の人間達と自分から極力関わろうとしない。軟弱者がとにかく嫌いな彼にとって、軟弱者が集まっているあの場所に留まるつもりなど毛頭ない。今は療養中につき仕方なしにこの村に留まっているが、元の力を取り戻し次第、この軟弱者しかいない村から出るつもりだ。

だが。

「……………チツ。 退屈にも程があるぜえ。」

忌々しげに呟く。

周囲には森があるし、獣がいる可能性だってある。だが、バルバトスが戦いたいのにはメイジだ。それも英雄視されているようなメイジである。とある理由から英雄嫌いなバルバトスにとって、そいつは格好のターゲットである。

だがこの村には、それらしい人間はいない。あのマチルダという女性はそのなりの場数を踏んでいるようだが、生憎マチルダは女。女と男の力の差など歴然としている。身のこなしから判断して体術も会得しているだろうが、おそらく一瞬で終わるだろう。

やはり、この村には長居すべきではない。バルバトスは改めてそう思った時だった。

「やい、お前！」

「……………？」

突然、背後から声がかかり、バルバトスは悠然と振り返った。

そこにいたのは、大体十歳ほどの髪が上に向かってツンツンしている少年。活発そうな顔立ちで、その目はバルバトスをしっかりと捉え、睨み付けている。そして少年の腰辺りの服をギュッと握り締めている、少年より年下と見えるウェーブがかった金髪の少女がバルバトスを怯えた表情で見つめていた。

そういえば、食事にもこの少年はこちらを睨んでいた気がしていたと、バルバトスは漠然と思い出した。

「無視すんな！ 返事しろ！！」

「……なんだ。」

黙り込んだバルバトスに、少年は威勢よく怒鳴り散らす、本人の低く唸るような声に少年と少女はビクリと体を震わせた。少女の方はすでに半泣き状態だ。

だが少年はなんとか気を取り直すと、再びバルバトスを睨む。

「お前、テファ姉ちゃんに何かしてないだろうな！」

「……何か、とは何だ？」

「とぼけるな！ お前みたいな奴を、テファ姉ちゃんが置いておくはずないだろ！ テファ姉ちゃんを脅したに決まってるんだ！」

バルバトスは、少年の言っている意味がわからなかった。ただティファニアは、自分からバルバトスにここで療養していったらどうかと提案して、それをバルバトスが承諾しただけに過ぎない。とんだいちゃもんをつけられたものだ。

「……貴様が何を言っているのか知らんがあ、俺は何もしてなどない。そもそも、俺はガキなんぞに興味などないわ。」

事実、バルバトスはティファニアには興味がなかった。

確かにティファニアは、美しく煌くブロンドの髪に可憐な容姿をしているし、何より一番目につくのは、彼女の胸部にある二つの胸。大抵の人間であれば、彼女の胸を見て誰もが目を奪われることは間違いないだろう。それほどまでに彼女の胸は存在感があった。ようは俗に言う『巨乳』である。彼女より年上であるうマチルダでさえも見劣りするほどである。

それでもバルバトスは、ティファニアに興味を示さなかった。それは純粹に、子供には興味が無い、ということ以外にない。確かにティファニアの美貌は凄まじいが、やはり彼女は子供。バルバトスの許容範囲外だ。

以前は、かつての同期であったデймロス・ティンバー中将の恋人である、アトワイト・エックス大佐を奪おうとしていたが、それはデймロスの実力を妬んでのこと。そこに恋愛感情はない。

そんなバルバトスのことなど知る由もない少年は、それでも噛み付いてきた。

「う、嘘言っな！ そんな言葉信じないぞ！！」

「ね、ねえジム兄ちゃんやめようよ。お姉ちゃんには仲良くしろって言われたのに、これじゃ怒られちゃうよ。」

「何だよエマ！ じゃあお前は、テファ姉ちゃんが傷ついてもいいっていいのかよ！」

「そ、そりゃやだけど……でもお。」

エマ、と呼ばれた少女は、バルバトスに挑みかかる少年、ジムの服を引っ張るも、頭に血が上っているジムには効果がなかった。

だがバルバトスは、ジムのその姿勢に感嘆するどころか、忌々しさ

を覚え始めていた。

「と、とにかく！ テファ姉ちゃんに指一本触れてみる！ 絶対オレが許さな」

「黙れ小僧！！！！！！」

ビリビリと空気を震わす音量でバルバトスは怒鳴る。あまりの震動で、森にいた鳥達は飛び立ち、騒ぐ。

そして怒声を向けられたジムとエマは、バルバトスのその怒号によってさっきの威勢は完全に消え失せ、驚愕と恐怖で硬直した。

「貴様あ……この俺に向かって、随分とまあ偉い物言いだなあ……ええ？」

歯を剥き出し、獲物を品定めするかのような目でジムを睨む。ジムは、蛇に睨まれたカエルの如く、その眼光に竦みあがった。

「俺様はなあ……貴様のような無駄に正義感ばかりでかく非力な存在が大嫌いなよお……。」

ゆっくりと、足を一步踏み出す。それにつられ、ジムとエマも無意識のうちに足を一步後ろへ下げた。

「何の力も持たぬ脆弱な存在があ……この俺に指図すんじゃない。」

一步二歩、ジムへと近寄るバルバトス。ジムとエマは下がろうとするが、背後の家の壁にぶつかり、後退をすることを許されなくなっ

てしまった。

「どうした？ さっきの威勢はどこへ消えた？ んん？」

嘲り、笑うバルバトス。恐怖に顔を引きつらせる、ジムとエマ。蛇に睨まれたカエル、というのは生易しいくらいだった。

言うなれば、今のバルバトスは蛇ではない。まさしく、獐猛な虎。獲物を目の前にした虎と等しかった。

「ひつ……！」

ジムは喉から声にならない悲鳴を上げ、ガタガタと震えだす。腰に顔を埋めるように、エマも震えた。

「……………ふん、この程度でびびるか雑魚が。」

二人を見下ろすバルバトスの目には、もはや嘲りは浮かんでいない。その目に浮かぶのは、何もできない愚か者に対する同情、哀れみのみ。

「まあ、いい。今日の俺はあ、紳士的ジェントルメンなよう……………それに免じて見逃してやるぞ。」

マントを翻しながら二人に背を向け、バルバトスは歩き出した。が、数歩歩いたところで止まる。

「だがなあ……………今度また俺に向かって生意気なことを言ってみるお？ ……………その時はあ……………」

微塵に砕いてくれるわあああ……。」

狂気を孕んだ笑みで振り返り、ジムとエマを抑圧する。それを直視したジムは恐怖によって催し、エマは直視しなかったせいで震え続けているだけで済んだ。

「…ふん。」

鼻を鳴らし、再び歩き出したバルバトス。やがてその姿が森の中に消えると、ジムは催した股間を隠そうともせずにへなへなと座り込んでしまい、エマに至っては緊張が解けてその場で気絶したのだ……。

鬱蒼とした森の中を歩くバルバトスは、未だ怒りが治まらずに、ドストドスと荒い歩調で歩き続けた。森の奥深く、とまではいかないが子供達でさえも来たことが無い距離まで歩いてようやく立ち止まる。だが、怒りが治まったわけではなく、今度はギリギリと齒軋りを始めた。

「…………ム力つくぜえええ……………！」

っていた。

それをバルバトスはまるで空気のように無視し、扉を開けようと手を伸ばす。

「……どこ行つてたんだい？」

突然マチルダから声を掛けられ、手を止めた。表情は変えず、見向きもせず。ただ動きを止めた。マチルダも目を閉じ、ただ聞いてくるだけ。バルバトスの方に見もしない。

「……貴様には関係ないだろう。」

「それもそうだね……と言いたいところだけど、私はアンタのことをこれっぽっちも信用してないのさ。聞くのは当たり前さ。」

「フン……そんなに自分達の身が心配かあ？ この臆病者が。」
クク、と笑うと、ノブを掴む。

だが、目の前に細長い棒切れが突き出され、またもや動きを止めることになった。

「……アンタ、ジムとエマになんかしたのかい？」

先ほどよりも鋭く、殺気の込もった声でバルバトスに問うマチルダ。それでもバルバトスはマチルダを見ようとせず、杖だけ見つめていた。

「……なんのことだ？」

「惚けんじゃないよ。アンタの怒号が聞こえたかと思って駆けつけてみれば、ジムとエマが恐慌状態に陥っていたじゃないのさ。原因はアンタ以外、考えられないんだよ……何したんだい？」

「ハッ！ 何、クソ生意気なガキどもに、大人の躰って奴をしてやっただまよう。」

バルバトスは鼻で笑い、突き出された杖を押しつける。だが、マチルダは再び杖を突きつけた。

「アンタの大人の躰って奴は、随分過激なんだねえ。怒鳴り声が遠くまで響いてきちまったよ。」

皮肉たつぷりに言い放つマチルダは口の端を吊り上げて笑った。

だが、次の瞬間には能面のように無表情になる。

「アンタ、今度うちの子供達に手荒な真似してみな？ この杖でアンタの喉元を搔っ切って、森の猛獣どもの餌にしてやんよ。」

その声は何の感情も込められていない。だが、その言葉にはマチルダの本気がありありと伝わってくるのを感じ、バルバトスはくぐもった笑い声を上げた。

「クハハ……随分肝っ玉が据わってる女だ……俺好みの女だぜえ。」

「ご冗談。アンタに好かれるくらいなら、勤め先の好色ジジイに尻撫で回される方が何倍もマシさね。」

マチルダは小さく笑って皮肉を込めて返すと、一人先に家の中へ入

っていった。

一人取り残されたバルバトスは、マチルダの物怖じしない態度を見て、この村に対する評価を改めた。

（なるほどお、軟弱者どもが群れをなしているだけかと思ってみればあ……どこの群れの中にもリーダーって奴あいるものだなあ……。）

ニヤリと笑いながら、バルバトスも家に入っていった。

バルバトスが村で生活を始めて五日が経った。しかし、それでも何か変化が起こったわけではなく、相変わらず子供達はバルバトスに怯え、ティファニアに泣きつく。バルバトスもそれに何の反応も示さず、ただ森へ入って体を動かし、少しでも元の力を取り戻そうとしている。マチルダも相変わらずバルバトスを敵視し、ティファニアはバルバトスと子供達が仲良くできないか、悩む日々が続く。

だが、唯一変わったことがあったとすれば、先日からジムの様子がおかしくなったことだった。ジムは子供達の中では年長ではあるが、以前の活発さにどこか影を差すようになり、覇気がなくなっている。しかも最近食事もよく残すようになり、顔色も悪い。エマも同様にジムほどひどくはないが食事の量が減ったのは明らかだった。

それを心配したティファニアはジムとエマに何かあったのかと聞いてみるも、二人はいつものような元気を見せてティファニアを安心させようとすする。それが空元気だというのは、ティファニアはすぐにはわかった。

原因は恐らくバルバトスなのだろうが、本人はまったく取り合おうとしない。話そうにもすぐにどこかへ行ってしまっし、食事中に話をして元々気まずい空気を悪化させるのも気が引ける。それでもチャンスを探すのに、ティファニアは必死だった。

だが、事件はその日の午後起こった。

昼食を終えたバルバトスは、相も変わらず無言で席から立ち上がり、家を出る。ティファニアが声をかけようとするも、すでにバルバトスは外に出た後だった。

(…どうすれば、バルバトスさんは皆と仲良くできるんだろう…。)

何度か思った言葉だったが、バルバトス自身が歩み寄ろうとしないのだ。無理もないだろう。

しかし、それでもティファニアは、子供達が暗い状況を何とかしたかった。バルバトスがいなくなれば子供達も明るい性格に戻るだろうけれど、それでは意味が無い。せっかくバルバトスという新しい家族が、一時的とはいえ増えたのだ。ティファニアは必死に案を巡らせた。

だから、ジムとエマが食事を残して立ち上がり、家を出たのに気付かなかった。

バルバトスは一人、いつも通り鬱蒼と茂った森の中へ入って得物である斧を取り出す。

斧の名は『ディアボリックフアング』。バルバトスが長年の間、苦楽を共にしてきた、所々にひびのような装飾が入った斧。見た目だけでなく、幾千の命を狩り取り続けたことによりその無骨な刃から禍々しいオーラが溢れ、バルバトス以外の者が持つことを許されないようになっていた。

愛用の斧を左手に持ち上げ、腰溜めに構えて大きく振りかぶる。元々逞しい筋肉がさらに膨れ上がり、意図せず周囲を圧倒する。

「むううんっ!!」

【ブウォンツ!!】

そのまま斧を横一閃に振るう。普通の人間ならそれで終わりだろう。

だがバルバトスは普通ではない。その斧から生み出された風圧が鋭い刃となり、目の前に並ぶ大きな木が数本、真ん中からスッパリと切れ、上半分が吹き飛んで地面に落ちる。切断された木は、斧に切られたとは思えないほどの美しい断面を外にさらけ出した。

「むうん……まだ力は完全には戻ってはいないかあ……。」

斧の先端を地面に突き刺し、左手を閉じたり開いたりして確認する。ここに来てしばらくが経つが、体がまだ本調子じゃないのはバルバトス自身、理解していた。だがこうでもして体を動かさないと、普段から戦い続けてきたこの体が疼いてしょうがない。仕方なく、こ

うやって木を切り倒したり、獣を切り殺したりして感覚を取り戻すついでに体を動かしているのだ。

「だが、この調子でいけば一週間もかからんだろうな。」

満足気に頷き、斧を引き抜く。数週間はかかるだろうと踏んでいたバルバトスにとって、これは嬉しい誤算だ。このままいけば、もっと早く力を取り戻せるだろう。そうすれば、あんな村ともおさらばできるものである。

(そうだ……俺にはカイルを殺すという目的がある……こんなところについていっまでもくすぶっているわけにもいかねえのよあ……。)

再び浮かび上がってくる、例の少年の顔。憎しみを込め、バルバトスは唸り声を上げた。

「それまで死ぬことは許されんぞおカイル……貴様を殺すのは、この俺なのだからなあ……！」

この世界にいない宿敵の姿を思い浮かべ、決意を新たにすバルバトス。斧を手に、背を向けて戻ろうとした。

その時、悲鳴が森に響き渡った。

ジムは、自分が許せなかった。自分は子供達の中で、ティファニアに続いて年長だということに自覚していた。

だから自分が率先して子供達を導かなければならないと、使命感を感じていた。そして同時に、戦いを嫌うティファニアを守るのも自分だと思っていた。

だから、あの時怪しい風貌をした男、バルバトスが何の前触れもなく居座り始めたのを見て、ジムは怒りを覚えた。あんな粗暴な男を、ティファニアは傍に置くはずがない。何者かに追われ、傷ついた時に、夜中に家に転がり込んで出くわしたティファニアを脅し、ここに居座るよう従わせたに違いないと睨んでいた。

見た目は恐い、だけどここで逃げてはダメだと自分に言い聞かせ、男を問い詰めた。そこまではよかった。

だが、男から滲み出る殺気に怯え、圧倒されてしまった。

情けなかった。年少であるエマの前で、こんな醜態を曝け出すことになるなんて思ってもなかった。一番上の姉であるマチルダに見られたことも、ジムにとっては屈辱だった。

だが、何よりショックだったのは、バルバトスの言い放った次の言葉だった。

『何の力も持たぬ脆弱な存在が……この俺に指図すんじゃないねえ。』

ジムは、今までの自分が行ってきたこと全てが無駄になるかのよう

な錯覚を覚えた。この言葉ほど悔しいと思ったことはない。

自分は年長であり、男だ。そんな奴が脆弱なんてこと、あるもんか！ という思いが、ジムの中で彼の体を突き動かす。

しばらく悩み続けた末、彼は行動を取ることにした。それは、バルバトスの行動を監視することだ。

悔しいが、あの男には勝てない。幼いながらにして判断力に長けた彼は、そう結論付けた。なら自分に何ができるか？ と問われれば、彼はこう答えるだろう。

『何か変なことをしでかしたら、それをマチルダ姉ちゃんに報告する！』

と。

マチルダも、バルバトスのことは快く思っていない。ゆえに、何か怪しい行動をした時点で、マチルダに取り押さえてもらえばいい。

それを監視するため、彼は食事の後にバルバトスの後を追うことにした。

だが、それに何故かエマも付いてきてしまった。エマは年少で、いつも泣かされてる女の子だ。それを自分がいつも仲裁しては慰めてきたから、彼女はジムのことを慕っている。一緒にすると言って聞かず、仕方なくエマを連れてバルバトスの後を追った。

しかしそれも途中までで、森に入ってからしばらくすると、バルバトスの姿が視認できなくなってしまった。それから慌ててバルバトスを探すが、どこを探しても木しか見えず、その大柄な体を見つ不出すことができなかった。大分森の奥まで進んだところで、エマも疲れを見せ始めたので、ジムは肩を落として今日は諦めようと思っただ。これ以上無理に頑張ろうとするエマに負担をかけるのも可哀想だし、あまり奥へ行くのはティファニアとマチルダに禁止されてい

るので先に進むのは得策ではない。
仕方なく、ジムは元来た道に戻ろうとした。

そして、今に至る。

『グウルルルル……。』
『うう……。』

ジムの目の前には、獲物を見つけた目でジムとエマを見つめ、口から大量の涎を垂らしている自分の体を遥かに超える巨大な猛獣である熊がいた。その大きさはバルバトスを頭一つ超える程のもので、若いジム達からしてみれば圧巻以外の何物でもない。

「ジム兄ちゃん……！」

「さ、下がってる！」

熊と対峙するジムは、足元で座り込んでいるエマを後ろへ下からせて、手に持つ太い木の棒を握り締めた。

エマは、腰が抜けたというのもあるが、それだけで座り込んでいるのではない。突然の熊の出現に驚き、木の根に足をひっかけて捻挫してしまったのが一番の原因だ。

ジムは己の迂闊さを呪った。この森には、こういった凶暴な獣が現れる可能性があったのだ。今まで出くわしたことはなかったが、決して森の奥には入らないようにとティファニアとマチルダに口を酸っぱくするほど言われていたのに、この様だった。

そのせいで、本当なら守るべき存在であるエマをこんな危険な目に合わせてしまった。ジムの中を後悔が蝕んでいく。

だが今は、この状況から抜け出すことが先だ。ジムは咄嗟に拾い上げた棒の先端を熊に向けて、剣士のように構えた。

「く、くく、来るな！ それ以上エマに近づいてみる！ オレが許さないぞ！」

言葉だけは立派。だが、ジムの足は恐怖で震え、目には涙が浮かんでいる。棒もブレまくり、傍から見れば滑稽でしかない。

熊はそう思ってるのか、嘲笑うかのようにその巨軀を進ませる。それでもジムは、自分を必死に奮い立たせようとしていた。

「き、聞こえないのか！ 来るなって言ってるんだよ！！！」

棒を突きつけ、威勢よく叫ぶ。それでも震えは治まらない。熊はじつくりといたぶるかのように、唸り声を上げつつ獲物であるジムとエマに近寄っていく。

（こ、恐くなんかない！ 恐くなんかないぞ！）

そんな熊を、ジムはいつしか対峙した時に見た、あの獐猛な男の姿と重ねた。それにより、さらに恐怖が湧き出てくるのを感じる。

（あいつの方がもつと恐かったんだ！ それに比べたら、こ、こんな奴、恐くもなんともないやい！！）

自分を叱咤し、震えを抑えようとする。だが、やはり所詮子供の喧嘩くらいしかしたことのないジムにとって、このような事態を冷静でいられるはずもなく。

（そ、それに！ 今エマを守るのは、オレしかないんだ！！）

『ガアアアアアアアアアアアアッ！！』

「ジム兄ちゃんー!!」

「あ……あ……。」

雄叫びを上げた熊に、ジムはもはや思考する余裕も消えうせ、完全に硬直してしまう。そんなジムに、熊は右の爪を高く振り上げた。

「う、うわあああああああー!!」

今まさに振り下ろされようとしている自分の命を刈り取るうとして
いる凶刃を、ジムは回避も防御もすることもできずに、ただ立ち尽くした。

【ズウウウンッ！！!!】

そして耳を劈^つかんばかりの振動が森を大きく揺らした。

「……………？」

だが、いつまで経っても衝撃が来ない。ジムは来るであろうはずだったが死に恐怖して目を閉じていたが、おそろおそろ目を開けた。

その目に飛び込んできた映像は、幼いジムにとって衝撃的以外に言葉が見つからなかった。

目の前に広がるのは、真っ赤な血が木々や草に飛び散り、鮮やかなコントラストを彩っている凄まじい光景。その血溜まりの中にあるのは、先ほどジム達を殺さんとはかりに襲い掛かってきていた熊が、縦一文字に左右泣き別れとなって、その中身を曝け出している。

「フン、所詮は低脳な獣。やはり俺にとっちゃあ何の潤いにもならねえ…。」

ビチャリ、と血を踏み、熊がいた場所には、元々黒く変色していたのが返り血によってさらに赤黒く染まった服を着た、バルバトスが不満気な表情で立っていた。その手には熊を仕留めたと思われる血塗れの物騒な戦斧が握られていた。その姿は、先ほどの熊でさえ可愛く見えるほどの悪魔のような恐ろしい姿。

「「うっ……………」」

かなりショッキングな光景。ジムとエマは、鼻を刺すような鉄の臭いに吐き気を覚え、草むらの影で盛大に昼食に食べた物を吐き出した。バルバトスはそれを見て、不快に眉を吊り上げる。

吐く物を吐いて、ようやく少し納まってきたジムとエマ。そして、若干落ち着き始めた頭の中で一つの確証を得ることができた。

自分達は助けられたのだ、と。

「な……何で……。」

“何で助けたのか？”という言葉が出ないまま、ジムは手にしていた棒を取り落として座り込む。バルバトスに怒鳴られた以上の緊張が解けたせいで、体に力が全く入らなかった。

「…何で、だとう？」

そんなジムとエマを見て、バルバトスはますます不快げに唸り、手にした斧を振るって刃に付着した血液を払った。

「そんなものお、俺の気まぐれに過ぎんわ。本来なら軟弱者である貴様らなんぞを助けるなど……反吐が出る。」

斧を仕舞い、吐き捨てるように言う。軟弱者と聞き、ジムは反論しようとした……が、すぐに止めた。

ジムは改めて痛感したからだった。熊に怯え、泣き、震えていた自分自身の弱さを。

自分の迂闊さでエマを危険な目に合わせ、あまつさえ自分は動けずただ突っ立っていただけだった。危険が去った今は、ただ恐怖による緊張が解けて腰が抜けた状態で立てないでいる。

結果的にこの男に救われたものの、そこに感謝の念はない。あるのは怯えていただけの自分に対する不甲斐なさと、バルバトスに救われたという悔しさだった。

「だがこれでわかっただろう？ 結局貴様は、吠えるだけに過ぎない負け犬でしかないのだということがなあ？」

追い討ちをかけるようにバルバトスが言い放ち、冷たく笑う。その言葉は、ジムの心をさらに抉った。

「弱者は弱者らしく……家にこもっていればよいのよお。」

そう言って、バルバトスは背を向ける。ジムは、ただ悔しげに歯を食いしばり、その背を見つめるしかなかった…。

「違うもん！」

歩み去ろうとしたバルバトスは足を止める。突然飛び出してきた叫ぶような声に、ジムは驚いて声の主を見た。

「ジ、ジム兄ちゃんは、弱くなんかないもん！」

エマは、未だ腰が抜けたままで、涙目のままで、自分なりに必死に叫ぶ。普段大人しく、引つ込み思案であるエマが、ここまで大きな声で話すのを初めて見たジムは内心戸惑っていた。

バルバトスが振り返り、横目でエマを見る。その眼光に肩を震わせるが、エマは今度は怖気づかずにバルバトスを見返す。

「そ、そりゃあおじちゃんに比べたら、ジム兄ちゃんは弱いかもしれないけど！ おじちゃんが思ってるほど、ジム兄ちゃんは弱くない

んかない！ だってジム兄ちゃん、私を守ろうとしてくれたんだもん！ だから弱くなんかないもん！ 強いんだもん！！」
「エ、エマ……。」

自分を必死に弱者じゃないことを訴える自分より下の少女が、初めてジムにとつて大きく見えた。子供達の中で一番非力なはずのエマが、ここまで自分の意思を強く伝えることは今まで無かったのだ。

ジムは、自分が守るべき存在が一番強く見えた。同時に、さっきまで責めていた自分を恥ずかしく思い始める。

ジムは再び、バルバトスを見る。当のバルバトスは、二人を横目で見ていた。その目は睨み付けているわけでも、哀れみを含んでいるわけでもない。だが何の感情も伺えなかった。それでもジムは、エマに負けじと声を上げる。

「確かに、オレは弱いよ。アンタからして見れば、軟弱者だよ……でも！」

さっきまで震えていた足を無理矢理立たせ、しっかりと地面に足をつける。まだ完全に痺れが消えていないが、今のジムにとってそんなの問題じゃなかった。

そうだ、今は弱くたったいい。弱いなら、これからその弱さを克服していけばいい。今は、今自分自身ができることをして、皆を守っていけばいい。自分のことを信じてくれる妹がいるんだ。その期待に応えられるように頑張っていけばいい話なのだ。

「それでもオレは、いつか強くなって、ティファニア姉ちゃんやエマ達を守るんだ！！ 今なんかよりもずっと！！ そして！

「！！！！」

湧き出てくる不思議な気持ち。それは歓喜というべきか、愉快というべきか。どちらともつかない複雑な感情。この世界にも、あの少年のような人間がいるということがわかった時、バルバトスの中にそれらがごっちゃんになったまま、豪快な笑い声となって出てきたのだ。

何故笑えるのかわからない。今まで散々憎らしいと思っていたその目を見て、何故怒りが湧き起こってこないのかわからない。以前のバルバトスではありえないことだった。

しかし、今はただただ嘲り以外の笑いが止まらない。バルバトスは、しばらく笑い続けた。

突然大声で笑い始めたバルバトスに、ジムとエマは怪訝な顔で見つめる。やがて、笑いが納まったバルバトスは、未だニヤリとした笑顔を二人へ向けた。

「おもしれえ！ 貴様が俺を超えるだと？ これほどまでにおもしろい奴は、この世界では貴様が初めてだぜえ！！」

その言葉は、まるで嘲っているかのよう。だが、ジムとエマは不思議とそう感じられない。

そこから感じられるのは、期待。親、というのは若干無理があるが、親が子に期待するかのような、そんな感覚を覚えた。

「いいだろう……やれるものならやってみやがれえ。いずれテメエが俺を超えられると思ったくらいに力が付いた時やあ、この俺が直々に相手してやろう！！ ハーッハッハッハア！！！！」

豪快に、心の底から愉快に笑う。この世界に来て、初めて嘲りなどではなく、気分がいい笑い声を上げることができた。

それほどまでに、ジムの評価はバルバトスの中でうなぎ登りに上昇していったのだ。今までは『噛み付くだけしか能のない負け犬風情』、というような評価をしていただけに、ここまで予想外の発言を取るなど思ってもなかったのだ。

そんなバルバトスの心情を知ってか知らずか、二人はキョトンとしていたが、ジムのその身を徐々に喜びが包み込んでいく。

それは何故かわからない。今まで敵視していた男からそう言われ、嬉しいと思うことがおかしい。

しかし、ジムはそんな男に認められたのが妙に嬉しかったのだ。

「……っつ！」

「！ エマ！？」

だが、足元でエマが苦痛に声を上げて、ジムは慌ててしゃがみ込む。エマは、突然のハプニングによって足を捻挫していたのをすっかり忘れていたのだ。

「大丈夫か！？」

「だ、大丈夫だよ……それより、お兄ちゃんこそ怪我ない？」

「お、オレは大丈夫だよ！ オレよりも、今はエマの怪我の方が大事だ！」

ジムはエマの捻挫した足を見る。幼いエマの右足首が、紫色に腫れ上がってしまったって痛々しい。これでは歩くのも困難だろう。

「……しょうがない、兄ちゃんが負ぶっていくよ。」

「え、でも……。」
「大丈夫だって。ホラ。」

しゃがみ、乗りやすいように背中をエマに向けるジム。先ほどの熊との遭遇で体力を消費したジムにそれは酷だとは思いつつも、歩けないエマは素直にジムの両肩を手で掴み、その背に乗った。

直後にジムは前のめりに倒れた。

「ジム兄ちゃん!？」

「あつたたた……ゆ、油断しちゃった。」

エマが慌てるも、ジムは苦笑混じりに呟く。怪我はないが、極度の緊張により大幅に体力を失ってしまったジムは、子供達の中で一番軽いエマでさえも背負えないほどになっていた。先ほどまでの誓いが台無しな気分になって、ちよつと悲しくなったジム。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫だってこのくらい……ふん！ ふん!!！」

気遣うエマに笑顔を向けるジムは、何度も立ち上がろうと試みる。しかしそれは全て失敗に終わり、出来損ないの腕立て伏せみたいになっっていた。

「……チツ、しょうがねえ。」

【ヒョイ】

突然、背中が軽くなったのを感じて慌てるも、すぐに自分の腰が何かに包まれて持ち上げられ、ジムは慌てた。

「うわ、な、な…!？」

「慌てんじゃねえ。落とすぞガキが。」

上からぶつきらぼうな声が聞こえ、ジムは見上げた。バルバトスの気だるげな表情が見え、そのまま彼は前を向きながら歩き始めた。さつきまで黙って見ていたバルバトスだったが、立てないジムを見てイライラを通り越して呆れてしまい、仕方なく、本当に仕方なく二人の腰を掴み、カバンのように持ち上げたのだった。

ジムとエマは抵抗することなくそのままじっとし、歩く揺れにその身を任せる。

同時に、エマはその血に汚れているはずの手から心地良い温もりを感じ始め、ジムはそのゴツゴツした手に包まれて逞しさと強さを感じ始めていたのであった。

家に着いた途端、血で真っ赤になった服を着たジムとエマ、その二人を無造作に持っている二人以上に血塗れになったバルバトスを見て、マチルダは半狂乱になって杖をバルバトスに向けるもティファニアが必死に阻止し、ジムとエマが必死に己の無事を訴え続け、誤解は解かれたというのは、また別の話…。

森の中での騒動が明けて、次の日の朝が来た。バルバトスの体もまだ完全とはいかずとも、日々回復していつている。回復力はバカみたいにすごいバルバトスならではである。

そして、今日もいつものように朝食を取るためにティファニアの家に集まる。最近の子供達も少しずつ慣れてきたらしく、子供達同士で食事中に会話をしたりするが、バルバトスとは目を合わせないようにしている。それほどまでバルバトスの目は恐いのだから、仕方ない。それがティファニアの悩みの種になっているとは露知らずに

「さ、食べましょう。」

『はい。』

ティファニアが言うと、子供達は朝食に手を付け始める。バルバトスも同時にスープ碗を持ち上げて、一気に飲み干す。最初はインパクトがあつたこの食べ方は、誰も文句を言わないおかげで周囲に認知されつつあつた。

だが、今日はそれに疑問を持つ者が現れた。

「ねえ、バルおじちゃん。どうしておじちゃんは、ご飯を噛まないで飲み込んだじゃうの?」

捻挫した足に包帯を巻いた最年少のエマが、向かい側に座るバルバトスの食べ方を見て首を傾げた。そんなエマを見て、子供達だけでなく、ティファニアとマチルダも驚いて食事を止めた。

昨日、形や理由はどうあれ、あの凶暴な熊から救われた上に怪我を

してしまった自分と兄を村まで運んでくれたバルバトスに、エマはすっかり警戒を解いたのだった。しかも何故かバルバトスのことを『バルおじちゃん』という愛称まで付け、親しみを込めて呼んでいる。

それを聞いたバルバトスは、エマを睨んで不快感に鼻を慣らした。

「フン、貴様には関係のないことだあ。」

「でもそれだと体に悪いよバルおじちゃん。」

だがエマはそんなバルバトスに怯えることなく言う。エマとジム以外の子供達は皆ビクリと体を震わしたというのだ。

「……この程度、俺には何ともないわあ……というより、何だその呼び方はやめろ。」

「それでも、ご飯はちゃんとよく噛んで食べなきゃダメだよおじちゃん。じゃなきゃせつかくのご飯がおいしくないよ？ あ、呼び方はね。この方がなんだか親しみやすいかなあって思ってる。」

尚も反論するエマは無邪気に言う。バルバトスからしてみれば、鬱陶しいだけであり、しかもバルおじちゃんなどという不快なあだ名を付けられてしまって若干青筋を立てる。オマケに妙にむず痒い。

だがそこで、バルバトスはいつものようにキレることはしなかった。こんなことで一タキレしていたら、時間と体力の無駄だ、と判断したからである。

「…チツ。」

もはや怒る気も無くしたバルバトスは、舌打ちしてからパンをそのまま口に放り込む。だが、そこでいつものように丸飲みしたりせず、

モゴモゴと口を動かしてパンを噛む。パンからパン特有の甘味と香ばしい香りが口の中で広がり、そしてゴクリと飲み込んだ。

「どう？ バルおじちゃん。」

「……フン。噛むのは面倒くせえが……まあ悪かあねえだろう。」

ぶっきらぼうに言うバルバトスに、エマは笑顔になる。その光景を見た子供達とマチルダは、完全に開いた口が塞がらなかった。

普段のエマは、大人しく、泣き虫で、引込み思案な性格をしているから、バルバトスに心を開くことなど絶対にはないと思っていた。だが目の前で行われているやりとりは、そんな彼らの予想を遥かに上回っていた。

そんな中、黙々と食事を続けるジムと、エマとバルバトスを見て最初は唾然としていたが、エマの笑顔を見てティファニアも自然と笑顔になっていたのだった。

「バルバトスさん！」

食後、バルバトスは家を出て森に行こうとするが、広場まで来ると背後から声をかけられて振り返る。そこには、慌てて追ってきたであろうジムが、肩で息をしながら呼吸を整えていた。

ついでにバルバトスを名前で呼ぶようになったのは、昨日のこともあつてのことだった。

「…なんだ小僧。」
「はあ、はあ……。」

未だ荒い息を吐くジムに、バルバトスはいつものような無愛想な声を出す。やがてようやく呼吸が戻ったのか、バルバトスを真っ直ぐ見つめた。

「お、お願いがあるんだ。」

言いづらそうに、だが目はバルバトスの目をしっかりと見つめる。バルバトスもそれを見返し、何を言い出すのか待った。

「お、オレを……。」

言いかけ、一呼吸置いた。

「オレを、鍛えてくれ!!」
「……はああ？」

突拍子のないジムの願いに、バルバトスは今まで出したことのないような声で口をあんどぐりと開けた。
今まで殺戮ばかりを繰り返してきたバルバトスに特訓をお願いするような奴は、キチガイか、あるいは相当なバカだろう。

「……貴様はあ、何を言っている？」

バルバトスは思った。こいつは後者だ。相当なバカだ、と。

だが、ジムはそんなバルバトスに必死にお願いする。

「オレ、このまんまじゃチビ達どころか、テファ姉ちゃんさえ守れないんだ！ だから、少しでも力をつけて、皆を守る力が欲しいんだ！ それが今、オレがすべきことなんだって、一晩考えてわかつたんだ！ 勝手なことだっというのはわかっているけど、このままじゃオレ、嫌なんだ！！」

そして遂には、地面に膝を着き、手も地面に着いて、俗に言う土下座の格好を取ってしまう。

「だからお願いだ！！ オレを、オレを鍛えてください！！ お願ひします！！！」

地面に頭を擦りつけ、バルバトスに半ば懇願する勢いで頼み込むジム。それをバルバトスは、目の色を全く変えずに見つめていた。

五分か、十分か。ジムにとってはとんでもなく長い時間、頭を下げている状態が続いた。と言っても時間は三分も経っていないが。

「……小僧、やはり貴様は、俺を嘗めてるようだなあ？」

やがてバルバトスから出た言葉は、完全に上から目線の物だった。それでもジムは頭を上げずにその姿勢を維持し続けた。

「この間は俺に向かって生意気な口を聞いて、昨日は俺を越えろと宣言して、そして今日はこの俺にそんな退屈な時間を作ってくれだとう？ ……もはや怒り通り越して、呆れてさえいるわあ。」

くぐもった笑いを上げ、バルバトスはそのまま一步後ろへ下がった。

「……貴様が望む特訓など、俺はする気はねえ。そんなものに時間
なんざ取らされてたまるかってんだ……まあ。」

ニイッと、いつもの獰猛な笑みを浮かべた。

「俺様の遊び相手程度には捉えてやってもいいぜえ？ ……さあ、
来いよ。」

「……え？」

ずっと頭を下げ続けていたジムは、驚いて顔を上げた。顔を地面に
付けていたせいで、額に土が付いてしまっている。

「……何をしている。来るのか来ないのか。さっさと来やがれって
んだあ！」

「！ は、はい！！」

ジムは立ち上がり、素手の状態で構える。その構えは別に何かの格
闘技の構えとかそんなものではない。そもそもそんなの習ったこと
ない。あくまでジムなりの気合の入れ方と、いつでも動けるように
という考えの下の構えである。

「……うおおおおおおお！！」

腰を落とし、一直線に突進するジム。その速さは子供ゆえのすばし
っこさがあった。

「ぬるいわあっ！！」

だがバルバトスにはそんなのまったく効果がない。軽くあしらわれ、ベチャリと地面に顔を付けることになった。

「ペッ……うおおおおおおお……!!!!」

だがそれでも、ジムは口の中に入った土を吐き捨てると再び突進する。今度はバルバトスの腰にしがみつき、必死の形相で押していく。

「うおるあー!!」

「ぎっ!!」

それすらもバルバトスは受け流し、ジムを地面に叩きつける。背中を強かに打ったジムは、呻き声を上げた。

「どうしたあ？ いいのは威勢だけかあ小僧？」

「くっ……まだまだあー!!」

挑発され、ジムはまた突っ込んでいく。だが今度は一直線ではなく、一旦バルバトスの前で止まって横っ飛びし、今度は右腰からしがみついていくフェイント攻撃を仕掛けた。だが、それすらもあしらわれ、また地面に体を叩きつけられた。

「ジムー？ いるかい？」

マチルダはジムの名前を呼びながら、ジムが住んでいる家の扉を開けた。だが、家の中からは返事はなく、シーンと静まり返っている。

「あれ、いないのかい？ ……まいったねえ、薪割りやって欲しかったんだけど……。」

マチルダは困ったように頭を掻きながら、家を出た。

昨日、バルバトスが血だらけのジムとエマを連れて帰ってきた時、自分はかなり取り乱して杖を向けてしまったが、あの血は二人自身の血ではなく、猛獣の血だと判断した時は、マチルダは自分の早とちりに赤面した。だがそれでもバルバトスに何かされたのではないかと疑った時、エマから何もされてないどころか、むしろ襲われていたところを助けてもらったと聞いた時は正直信じられなかった。あの獐猛で唯我独尊で、殺ししか趣味がないと言われても違和感ないような男がそんなことをするなど予想もしていなかったからだ。だが、それは今朝のエマの態度を見て真実だとようやく認めた。あの臆病なエマが、凶悪な面をしたバルバトスに懐いていたのだ。これには信じざるを得ない。それでも、マチルダはまだバルバトスを許したわけではなかった。あの残虐性溢れる男だけは、何をしでかすかわかったものではない。こうしてジムに薪割りを頼みに来たのも、自分がバルバトスを見張り続けるためだった。

せめてあの男がいる間だけは、油断してはならない……マチルダは、家族に害が及ばないよう、細心の注意を払っていた。

「…？ おや？」

ふと、広場へ足を踏み入れてみると、何やら子供達が騒がしい。「ガンバレー！」とか、「負けるなー！」とか、誰かを応援しているようだった。子供達がじゃれて遊んでいるのだろうか、それとも喧嘩だろうか。そうだとしたら止めなければならぬ。マチルダは広

場へと足を踏み入れた。

その時、子供達に混じって一人サラサラした金髪をした人物がいるのを見て、喧嘩ではないとマチルダは判断した。

「テファ？」

「あ、マチルダ姉さん。」

声をかけると、ティファニアは反応して振り返った。普段から争いを好まない彼女だから、喧嘩であるならばこのような野次馬のようなことをすることはない。

「何見てるんだい？ 皆も騒いでるようだけど。」

「フフツ…あれ見て。」

マチルダが聞くと、ティファニアは小さく笑って指を指す。その指の先を辿り、騒ぎの原因をマチルダは見た。

「うりゃあああ…!!」

「甘いわあっ…!!」

「うわああああ…!!」

「はっはあ…!!」

「クツソオ！ どりゃあああ…!!」

「雑魚があ…!!」

ジムがバルバトスに突進をかまし、何度もこかさされてはジムは立ち

上がり、またこかさされても体当たりをし続ける。バルバトスは息一つ上がっていないのに対し、ジムはすでに体中泥だらけで息も上がっている。どう見てもこれはバルバトスがジムを痛めつけているとしか思えず、マチルダは杖を抜き取って駆け寄ろうとした。

「あ、待って姉さん！」

だが、予想外にもそれを止めたのはティファニアで、マチルダは面喰らった。

「ちょ、何で止めるんだいテファ！？ どう見てもあれは奴がジムを…！」

「違うのよ姉さん！ ジムを見て！」

ティファニアに言われ、マチルダはジムを見る。

「どうしたあ！ もっと楽しもうぜえ！！！」

「うりゃああああ！！！」

挑発するバルバトスに、ジムは真剣な面持ちで果敢にまた挑みかかる。だが、その顔に浮かんでいるのは、憎しみでも、怒りでもない。

どこか、楽しげな感じだった。

バルバトスからしてみれば、これは単なるお遊戯であり、暇つぶしでしかない。しかし、ジムにとっては今後のための重要な特訓と認識しており、倒せないにしてもせめて一発かましてやりたいと思っている。

だが、続けていくうちにやがて楽しくなっていくのをジムは感じていた。

そもそも、この村でティファニアに次いで年長のジムは、本気で体当たりなどを子供達にしてみたら、それだけで怪我をさせてしまうくらいの力がある。だからといって女性であるティファニアやマチルダにぶつかっていくことなどできるわけもなく、こうして力を持って余っていたのもまた事実。

そこに、バルバトスというジムの本気をぶつけても、全く歯が立たない相手が現れたのだ。本気でぶつかっていくというのが初体験であるジムにとって、今まで溜め込んでいた力を思う存分発揮していくうちに、ジムは夢中になっていったのだった。

「ジム兄ちゃんガンバレー！」

「負けるなー！ いけー！」

「バルおじちゃんもガンバってー！」

「やっつけるー！」

そして、この騒ぎを聞きつけて集まってきた子供達もすっかり夢中になり、ジムとバルバトスの特訓、もと戯れを、ほとんど野次馬の如く観戦していた。最初は、ジムがバルバトスに苛められていると勘違いして怯えていたが、ジムが何度も突進してはバルバトスにかわされて倒れたり、いなされたりしているのを見ているうちに、その熱意が子供達に伝わったのか、ジムの応援し始めたのだ。中にはバルバトスのことを応援する子もいた（まあ言わずもがなエマであるが）。

「ジムー！ あまり無茶しちゃダメよー！」

終いには、騒ぎに駆けつけたティファニアも子供達に便乗して見る始末。今はバルバトス以外に目が入らないジムだが、気付けば顔を

真つ赤にして恥ずかしがるだろう。

そんな光景を、マチルダは朝食よりもショックを受けたようで呆然としていた。いつしか抜いていた杖もダランと下がっている。

先ほどまでバルバトスのことを警戒しきっていたマチルダにとって、すっかり村の子供達と馴染んでいるバルバトスを見て拍子抜けするにも程があつた。

だがバルバトス本人からしてみれば、子供達に混じって遊んでいる気など毛頭ない。自己の満足のためにジムに付き合っているだけである。だが、あのマチルダから見ても戯れているとしか思えない事を繰り返していることを、バルバトスはわかつていなかった。

(ホント、よかつた……。)

そんなマチルダの横で、ようやく子供達が笑顔を取り戻し始めたのを見たティファニアは、心の底から安堵し、同時に喜んでいたのである。

で、結局ジムはずっとバルバトスにボロボロの状態になつてもあしらわれ、地面に倒れこむまで続いたのだった…。

あれから数日が過ぎた。あの騒ぎによって、朝食は以前の活気を取り戻し、子供達が笑いながら食事を楽しんでいた。それでも相変わらずバルバトスは会話に参加しようとしなかったが。しかし、二つ変化したことがあつた。

一つは、子供達がバルバトスに少しずつ笑顔を向け始めたということ。もう一つは、バルバトスの横にエマが座っているというものである。

大柄な体格のバルバトスは、席を三人分占領しているため、バルバトスが座っている側のテーブルには誰も座れなかったが、エマのような小柄な少女なら余裕で座れる程の間があり、エマはそこに座ると主張した。ティファニアも断る理由がなかったゆえに、エマをそこに座らせることにした。最初は全員、少し緊張したが、昨日の食事風景と変わらず、丸飲みしようとするバルバトスをエマが可愛らしく注意したりする等、和やかな空気が流れていた。

こういった空気は好まないバルバトス本人からしてみれば、非常にヒツジヨ〜に不本意ではあるが、暴れださなかった点は賞賛に値するだろう。

そして今日は、子供達にとって楽しみであった日でもある。それは、村の近くにある湖に、子供達全員で、体の汚れを落とすついでに水浴びしに行くというのだ。ティファニアとマチルダは、家事を一通り終えてから湖に行くことになっている。そして、湖にはバルバトスも同行することになっていた。

最初は、「何故この俺がそんなガキどものお守りなんぞをせねばならねえんだ。」と不機嫌丸出しに言っていたが、湖に浸かることによつて体力の回復の促進が早くなるとティファニアに論されて、渋々と承諾したのである。湖にそのような効果があるかわからないが、子供達は、特にエマがバルバトスと一緒にいきたいと駄々をこねていたので、バルバトスが行くに値する理由を付けるしかなかったのだ。なかなか計算高いティファニアの一面を垣間見た気分。

そうして、子供達は水浴びしにいく準備を各々暮らしている家で喜

々として始める中、ティファニアはバルバトスに言った。

「バルバトスさん。その服、ここで脱いでいってくれませんか？」

ある意味大胆発言に、マチルダは今まで一番ショックを受け、心なしか白く燃え尽きたように見えた。

だがバルバトスはそんなセリフに動揺したりせず、怪訝に眉をひそめた。

「むう？ 何故俺がここで脱がねばならねんだあ？」

「はい、皆が遊びに行ってる間に、服を洗濯しておこうと思ってるんで。だからバルバトスさんのものと一緒に洗っておこうかなって。随分汚れているみたいですし。」

ティファニアの言うことにも一理ある。バルバトスの服は、返り血云々で相当汚れている上に、胸元が斜めに切り裂かれているのだ。汚れているというより、ボロボロなのである。ティファニアが気になるのも無理はなかった。

純粋な笑顔で言うティファニアに、バルバトスはしばしの間考えながら、一つ鼻を鳴らしてからタイトスのような服を脱ぎ始める。

「え、あの、今ここで脱がなくても……。」

脱いでいくことに露わになっていく褐色肌の幾たびの戦いによってできた傷だらけながらも逞しい肉体を見て、ティファニアはどんどん赤面していく。“ここで”とは言っても、それは“今この場所です”という意味じゃなくて、バルバトスに割り当てた部屋でという意味なのであったが、そこまで考える思考を持ち合わせてなかったバルバトスはどんどん脱いでいく。

やがて完全に服を脱ぎ終えたバルバトスは、パンツ一丁の状態になった。

「ほらよ。」

バサツと汚れた服をティファニアに無造作に投げつけ、ティファニアはそれを慌てて受け止めた。

「洗濯するのであればあ、それなりに綺麗にしときやがれえ？」

そしてそのまま、彼は家を出て行った。後に残されたのは、顔を真っ赤にして呆然としたティファニアとマチルダだけ。そして二人は、同時に同じことを考えていた。

(何故あんな細いパンツなんだろう?)

バルバトスのパンツが意外にも黒いビキニパンツだったことに、二人は思いもよらない衝撃を受けたのであった。

「やつほー!!」

「えーい!!」

ドッポーン、とやんちゃな男の子達は、春の中甸とは言え冷たい湖の水の中に勢いよく飛び込んでいく。女の子達もそれを見て触発さ

れたのか、自分達もはしゃぎながら飛び込んでいった。

「ヒヤア！ 冷たいーい！」

「アハハハ！」

冷たい水の中で最初はブルルと震えていた子供達であったが、やがて慣れ始めたのか元気に遊び回った。水のかけあいをしたり、泳ぎで速さを競ったり等、年相応な元氣っぷりを見せる子供達。

それを遠くから眺めているのは、子供ではなく、その巨軀を水の中に沈めてじっとしているバルバトスであった。

「……………フン。くだらねえ……………」

よくもまあ、あんなにはしゃげるものだ、バルバトスは嘲笑う。やはり脆弱な者達は、この程度の遊びで満足するのだろうか。

バルバトスにとっての娯楽とは、やはり戦いの中でしか味わえない、あの自然と沸き起こってくる闘争本能、敵と対峙した時の緊迫感、敵陣の中で暴れまわる爽快感、敵を葬った瞬間の快感、そして強敵と巡り合った時の己の力をぶつけられるという期待。これら全てが、バルバトスにとっての唯一の娯楽であり、スタイルであった。このような水浴びで楽しむような男ではない。

だが今は、この体を癒すことに専念しよう。そう思い、彼はゆったりと、冷たく澄んだ底まで見える美しい水の中に浸かった。

「おじちゃん。バルおじちゃん。」

「……………ああん？」

だが、それを邪魔する者が現れた。エマである。

足を捻挫してしまっているエマは、皆と一緒に湖に入れないので、

服を着てる上体で岸の上で皆を眺めているだけだったが、彼女にとってバルバトスがいるだけで満足だったので気にしていない。そんなエマが、岸からバルバトスに声をかけたのだった。

「おじちゃんには遊ばないの？ 皆楽しそうだよ？」

「ハッ！ くだらねえ。俺あ、ああいった遊びは大っ嫌いなのよお。」

純粋な疑問に、バルバトスは機嫌悪さを強調するかのようにつつた。そんなバルバトスに気付いたのか、何人か子供が集まり始めた。

「えー、バルバトスさん、一緒に遊ばないのー？」

「遊ぼうよおじさん。」

「ねーねー。」

口々に言い始めた子供達に、バルバトスは舌打ちする。

「ガキどもが……あまり調子に乗るなよお？ 俺あお前らみたいな連中が嫌いだということ、忘れてんじゃねえだろっとなあ……？」

バルバトスは凄み、子供達を威圧する。だが、子供達は黙り込んでから互いに顔を見合わせ、ヒソヒソと話し始める。

「……………何をしている貴様ら？」

そんな子供達を怪しく思ったバルバトスが聞いた瞬間、一人の子供がバルバトスの方へ向き、

「えい！」

【バシャッ！】
「…………。」

水をかけた。

「…………何の真似だあ？」

ピクピクとこめかみをヒクつかせながら聞くバルバトスだったが、

「えい！」

【バシャッ！】

「…………。」

最初の子供がかけたのを筆頭に、次々とバルバトスに水をかけはじめた。

「えい！」

【バシャ！】

「それぞれ！」

【バシャバシャ！】

「……………………。」

「くらえー！ アクアランスー！」

【バシャッ！】

「よし、じゃあ僕はレインストーム！」

【バシャシャシャシャシャシャ！】

服はドロドロになったが、新しい服に着替えなおしているから服だけは綺麗な状態だった。

薪を台代わりの切り株の上に置いて、鉞を勢いよく振り下ろして薪を割っていく。そうした作業を繰り返す続け、新しいのを山積みされた薪の中から取り出すとした。

「フン、なんとも頼りない振り方だなあ？」

背後からそんな声がかかり、ジムは声だけで誰なのか判断できたが、それでも振り返った。

バルバトスが腕を組み、皮肉を込めて笑いながら家の壁にもたれて立っている。

だが、いつもと違うのは、着ている服。麻で織られた地味な色合いの半そでの服と同色の長ズボンを着ているバルバトスは、格好だけ見ればその辺にいる平民と大差変わりはない。だが、その風貌と彫りの深い敵つい顔つきのせいで、どうにも不恰好に見えてしまう。

それでもそんな格好でいるのは、マチルダがたまに村を訪れる行商人からこの服を買い取り、バルバトスに着せたのである。理由は、パンツ一丁（しかもビキニパンツ）で村をうるつかれたら、ティファニアと子供達の精神衛生上よくないと判断したせいである。だが生憎とこの村には子供しかおらず、バルバトスのような相当ガタイのいい男が着るような服は当然置いてない。そこに行商人が来て、服はあるかと訪ねたところを、これらの服を買ったのだ。元の服が乾くまでの間これを着て欲しいと言われ、バルバトスとしても別にこれは断る必要がなかったので大人しく着たのであった。

「しょうがないだろ？　これがオレの力なんだから。」

ムス、と答えるジムに、バルバトスは鼻を鳴らして歩み寄る。雑用

切り株があつた場所は小規模のクレーターへと変貌し、ジムは口をぱっくりと開け、バルバトスは手に鉞の残骸を持って振り下ろした状態のまま、時間が止まつたかのように停止した。

「何！？ 何かあつたのジム！？」

そこに馬鹿でかい音と震動を聞きつけたティファニアが飛び出してきて、慌ててジムに駆け寄る。だが、バルバトスの前にあるクレーターを見て、ティファニアも啞然としたのだった。

それから十分後。最初に動き出したのは、何となく気まずい空気を作り出したバルバトスで、鉞の残骸を投げ捨ててチツと舌打ちして一言。

「所詮は軟弱な小道具……やはり俺のような者にはふさわしくはねえなあ……。」

物壊しておいてこの言い草。全く反省の色を見せないバルバトスに、ティファニアとジムはある意味度肝を抜かれたのであった。

その日の深夜。バルバトスは自分の部屋の床に座り込み、壁にもたれながら目を閉じていた。

この部屋は、最初にバルバトスが怪我をして倒れこみ、運ばれた部屋。後から聞いたが、女性であるマチルダがどうやって巨躯のバルバトスを運べたのか疑問に思っていたが、『レビテーション』なる浮遊魔法を使つて運んだのだという。

部屋の中には使われることのないクローゼットと、初日にバルバトスが壊した底が抜けたベッドがある。この村にあるベッドではバルバトスの体は支えきれず、仕方なしにバルバトスは床に座り込んで眠ることを選んだのだ。そもそもベッドで寝るということ自体が不要であるバルバトスにとって、そういうことなど些細なことであった。ようは、眠ればそれでよかったのだ。ティファニアは最初こそ客人であるバルバトスが床で眠ることに反対したが、バルバトスにあう寝床が用意できないと理解すると、納得いかないままではあるが床で寝ることを許したのだ。

バルバトスは胡坐をかいて目を閉じていたが、しばらくするとパチリと目を開いた。そして沈黙を続けていたが、徐々に歯を剥き出して唸り声を上げ始める。

「……俺は一体全体、何をしているのだあ……！」

それは、バルバトス自身に向けた呆れとも怒りともつかない、本心への質問。

最初、バルバトスはこの村に身を置いたのは、療養のため。『神の眼』によるエネルギーを浴び、自らの力が消耗したのを回復するのに、自分はこの村で生活を始めたのだ。それこそ、体力が回復するならば、その日のうちにでも村を速攻で出て行くつもりになっていた。

だが、気付けばもう一週間をとうに過ぎていた。

完全に回復したのは、ジムとエマが熊に襲われた次の日であった。今ならば晶術だけでなく大技『ワールドデストロイヤー』だって余裕で放てる。数週間経たずとも、完全に『神の眼』の残留エネルギーは消え去り、元の力を取り戻したのだ。

それなのに、今自分は何をしている？ この状況に甘えているかの
ように、自分はこの村に馴染み始めているのではないか？ 自分を
慕ってくる子供達を、憎からず思い始めているのではないか？
違う、断じて違う。自分は、自分をこの世界に追いやり、激痛と絶
望を味あわせたあの少年に復讐するために、この村の者達を利用し
たのだ。今この場にいるのは、そんな甘ちゃんて脆弱な存在達を心
のどこかで嘲笑っているだけなのだ。

バルバトスは何度もそう言い聞かせ続けるが、ハツと自嘲気味に笑
った。

「……俺も随分と甘ちゃんになっちまったもんだぜ……。」

そして同時に、今まで感じたことのない感情に囚われ始めた。

ここにいれば、今までの自分は無くなる。強さを追い求め、様々な
敵を死に追いやってきた殺戮の狂戦士、バルバトス・ゲーティアは
消えてしまう。そんな思いに駆られ始めた。

そういつた強迫観念に、バルバトスは支配されていた。

「……まあ、いい。」

ゆっくりと腰を上げて、バルバトスは立ち上がる。窓から見える双
月に目をやってから、部屋を出る。そして、普段皆が食事を取る場
所へ向かう。

ふと廊下の先を見れば、そこから淡い光が漏れていた。誰か起きて
いるのだろうか？ だが、バルバトスはそのような疑問を抱かず、足を
踏み入れた。

テーブルの上にランプを置き、その明りの下、イスに座ってこちらに背を向けている少女が手を動かしているのが見えた。周りに明りがないせいで、その姿がボンヤリとして見える。

「……こんな時間に何をしている？」

バルバトスは声をかけると、少女、ティファニアはハツとしたように振り返った。

「あ、バルバトスさん……起きちゃいました？」

「元より寝てなどおらんわあ。」

聞くティファニアに素っ気なく言い返すと、バルバトスは家の玄関へと歩いていく。

「？ どちらへ？」

「……服を取りに行く。もう乾いているだろうよあ。」

「それなら、明日の朝にでも私が取り込んでおきますけど……？」

「そんな必要ないわあ。」

玄関のドアノブに手を伸ばしながら、バルバトスは淡々と答えている。

だが、次に出たティファニアの言葉にその手を止めた。

「……行ってしまわれるのですか？」

「……………」

ティファニアの方へ向いていないので、その顔は確認できない。そして、その声には絶るような感じは一切なく、どういった気持ちなのか察することもできなかった。

しばらく流れる沈黙。森から聞こえる梟の鳴き声だけが聞こえる空間に、バルバトスとティファニアは取り残される。それは気まずい物ではない、かといって落ち着けるようなものでもない。

やがて、バルバトスは僅かに、ティファニアの顔が見えない程度に振り返った。

「…すでに、俺の中にある力は回復している。これ以上貴様らと一緒にいる理由などない。」

「……………」

バルバトスは、一切の感情を込めずに言い放つ。

これ以上ここににいるわけにはいかない。ここにいれば、今まで積み重ねてきた物も、自分が成すべき復讐も、全て失ってしまう気がするのだから。

子供達が悲しもうが構わない。バルバトスにとって、自分だけが全てなのだ。他なんていらぬ。

「言うておくがあ……………今、俺を邪魔しようとするれば、貴様とて容赦はせんぞあ？」

今度は、殺気も込めてティファニアに言う。その言葉は本気だった。自分が行くのを止めるということは、自分自身を否定されるようなことと同じこと。それをするのであれば、誰だろうとなぎ払ってい

くつもりでした。

だが、ティファニアから出た言葉は予想外のものだった。

「……わかってます。なんとなく、そんな気はしていたんですよ。」
「……何だと？」

止めると思っていたティファニアに、バルバトスは驚いた。

「バルバトスさんは、どんな理由があるかわからないけれど、この村に留まっているような人じゃないって、薄々感じ始めてたんです。だから、いつか近いうちにこの日が来るんじゃないかなって。それが今日とは思ってませんでしたけど……。」

アハハ、と笑うティファニアに、バルバトスは依然として振り返らないまま、眉をひそめた。

「……オイ、一つ聞かせてもらおうか。」
「？ はい、何ですか？ 私に答えられるようなものであれば何でも答えますけど……。」

そしてそのまま、前々から疑問に思っていたことを口にした。

「貴様あ、何故俺のことをそうやって気にかける？ 俺は貴様を殺そうとした男だぞ？ それを寢床に運びこんで手当てをしたり、療養するかなどと口走ったり。俺は何度も貴様を心の中でバカにしたものだがなあ？」

初日では、この少女のことをバルバトスは酔狂な女と見なした。ここまで自身の危険を顧みずに、傍に置いておくなど、正気の沙汰と

は思えない。

そんなバルバトスに、ティファニアはクスリと笑った。

「ああ、それですか……えっと、おかしいって思われるかもしれないですけど……。」

少し言いよどんで、ティファニアは言った。

「なんだか、悲しい目をしてる人だなあって、思ったんです。」

「何い？」

目を見開いたバルバトスは、完全に振り返ってティファニアの顔を見る。その顔は、優しさで満ちた笑顔をしていた。

「最初は、怖い人だなんて思いました。けれど、あなたの目って、どこか悲しいような、そんな物を感じたんです。それが何なのか、私にはわかりませんが。だから、あなたは私達を傷つけるなんてことは、しないと私は思ったんです。これはただ、私がそう思っただけですけれど……。」

ティファニアの言葉に、バルバトスは珍しく焦る。

(悲しい、だと？ この、俺がか……？)

喜びや怒り、哀れみはあれど、悲しみといった感情が自身の中に存

在しているというのは、バルバトス自身、全く気付いていなかった。喜び、怒り、哀れみは、殺戮や戦場でしか味わえない感情。だが、そこに悲しみという感情はない。そんなものは遙かの昔に捨ててきたのだから。

だがこの少女は自分の目を悲しい目をしていると言った。狂気や怒りに染まった目をしていると言われればわかるが、そんなことを言われるのは初めてだったバルバトスは戸惑いの念を隠せなかった。

だが、怒りの感情は出てこない。そしてその思いを隠すかのように、バルバトスはくぐもった笑いを上げ始めた。

「クツハハハ……この俺が悲しい目をしている、だとう？ やはり、貴様は酔狂な女だぜい……。」

「フフ、そうかもしれませぬね。」

そんなバルバトスを見通したかのように、今度はイタズラっぽく笑うティファニア。やがて彼女は、動かしていた手を止めて立ち上がり、台所へと向かうと、そこに置いてあった四角い何かを手にとってバルバトスに歩み寄った。

「はい。」

「ん？」

バルバトスは、ティファニアが差し出してきた物を見た。

そこにあったのは、バルバトスが普段着ている戦闘用の服。そして、大きめのバスケットだった。

「服はさっき私が取り込みました。ついでに、胸元が大きく裂けていたでしょう？ そのままだったらやっぱり寒いかなって思って、

縫い合わせておきましたから。あ、汚れもちゃんと落としましたよ？」

「……………」

そう言われ、バルバトスは服を手を取った。こびり付いていたはずの血は、綺麗さっぱり落ちていて、元の色鮮やかな服へと戻っていた。血はなかなか落ちにくいと言われていたのに、ここまで綺麗にするというのは、ティファニアの洗濯の腕がよかったのがあった。さらに極めつけは、大きく切り裂かれて胸元を曝け出していた服の銀色の部分が、黒い糸で縫い合わされていた。おかげで服の裂け目は消えたが、代わりに不恰好な刺繍が付いたようにも見えた。まああれだけ大きな裂け目であったので、完全修復は難しかったのだろう。

「それとこれを。途中でお腹がすいたら大変ですから、道中에서도……………」

バスケットも受け取り、中を開いてみる。そこには、食事に出てくるパンとリングがいくつかと、木製の深皿に入ったサラダに切り分けられたローストビーフのような肉が何枚も入っていた。量が多いのは、バルバトスの長旅を祈ったことだろう。

「……………」

それらを無言で見つめていたが、バルバトスはバスケットを置くとおもむろに着替え始める。麻で出来た安物の服は脱ぎ捨て、元の服へと着替えなおす。それを見て、ティファニアは少し顔を赤くするも、取り乱したりはしなかった。

綺麗になったついでに斜め一線の黒い刺繍が追加された服着て、若

草色のマントを羽織ると、バルバトスはバスケットを再び持ち上げた。

「……フン。ありがたくもらっておいてやろう。」

相変わらずのぶっきらぼうな物言いに、ティファニアは微笑む。そして、バルバトスはそのまま玄関を開けた。

「……まあ、世話にはなった、とだけは言っておいてやろう。」

変わらない口調のまま言うその言葉に心が込められているのか、いないのかは判断できない。それでも、ティファニアにとって、その言葉を嬉しく感じた。

「はい。短い間でしたけど……あなたと生活できて、楽しかったです。」

「……ほざいてる雑魚が。」

【バアン！】

吐き捨てるように言って、バルバトスは家の扉を乱暴に閉めた。

後に残されたティファニアは、ずっと我慢していた涙を流し、手で拭った。そして、腰のベルトの後ろに差してあった、タクトのような杖を引き抜くと、テーブルの上に置いた。

「……わかっていたつもりだったんだけどなあ……。」

そう言い、覚悟していたもののやはりバルバトスがいなくなっただけらしいものはつらかった。

確かに、短期間の間とはいえ、バルバトスがいる間、新しい家族が

増えたようで楽しかった。最初こそ自分も恐怖を感じていたし、子供達にも受け入れられなかったが、やがて少しずつ馴染んでいった。子供達はバルバトスに懐いていった。それを本人はよくは思っていなかったようだけれど、そんな子供達を振り払いもせずには相手をしてくれたバルバトスは、ティファニアをたくさん笑わしてくれたのだ。最初は、自分が唯一使える、謎の多い魔法……『忘却の呪文』を使おうと思っていた。今までもそうやって、盗賊の類からこの村を守ってきたのだ。この村を去る時、村の存在が明らかにされないためにもと、魔法を使う気だった。だが、バルバトスがこの村のことを言いふらすとは思えず、何より彼は不本意だろうが、この村にいたという記憶を忘れないでいて欲しいとティファニアは思ったのだ。

ぶつきらぼうで、上から目線で、豪快で、けれどどこか茶目っ気のあるバルバトス……そんな彼は、もういない。流れ出そうになる感情を見られまいと隠していたが、バルバトスが去った今、静かに涙を流し始める。

「…………泣いても、仕方がないか。」

自分が泣くわけにはいかない。そう言い聞かせ、ティファニアはテーブルの上に置いてあった裁縫セットを片付けつつ、明日の朝、バルバトスがいなくなったことを泣いて悲しむだろう子供達を慰める言葉を探すのだった…。

村を出て夜中の暗い森に入り、そう歩かないうちに、バルバトスは足を止める。そして視線は動かさず、口を開いた。

「……女あ。そこにいるのだろうか？」

低い声で言うバルバトスに、風によって草木はざわめき……それに混じって、声が聞こえてきた。

「やっぱりバレてたのかい。こういうのはやっぱりアンタは鋭いねえ。」

声の主は、マチルダだった。しかし、その姿は完全に闇に溶け込んでおり、姿を出そうとはしない。

「フン、俺の命でも狙いに来たかあ？ だとしたら上等だあ。」

僅かな殺気を放出し、ニヤリと笑うバルバトス。だがマチルダは、ハッと笑った。

「お生憎様。アンタの実力だと返り討ちにされんのがオチだろうし、第一こんなところで私は死ぬわけにはいかないさね。あの子らが悲しむ。」

「ほお？ 前々から俺を殺そうと躍起になっていた奴のセリフとは思えんなあ……？」

その言葉が本気だとわかると、バルバトスは殺気を引っ込める。それと、どこかつまらなさそうに言った。

「何、今だってアンタのことは信用してないし、正直嫌いだよ……ただどね、妹達がアンタに心開いておいて、私だけがのけ者扱いされるんのは気に食わないしね。」

苦笑混じりの声で言うマチルダ。“心を開いた”という言葉に、バ

ルバトスはフンと鼻を鳴らす。

「俺は貴様らと仲良しごっこをしていたつもりなどおないわ。」

「ふうん、その割には随分楽しそうに……ああ悪い悪い、言いすぎたね。」

バルバトスから再び殺気が漏れ出し、マチルダは若干慌て気味に話すのをやめた。

「にしても、黙って夜中に出て行くなんて、まあ洒落たことするじゃないか。」

「抜かせえ。いてもたってもいられなくなつたまでよ。」

「はいはい、アンタがいうならそういうことにしてやるよ。」

「……貴様出て来い。八つ裂きにしてやるつ。」

「とと、怒らなくてもいいじゃないか。」

からかい気味のマチルダに、バルバトスは歯を剥き出して忌々しげに暗闇を睨む。

「……ま、とりあえず。私の気持ちがどうこうより、一応アンタは村の一員だつたんだ。別れの挨拶くらいさせておくれよ。」

打って変わり、マチルダはふざけていない声で言い、バルバトスは無言になる。内心は気に食わないが、その話は事実だった。

「……俺にそんなものは不要だ。さつさと消えろ。」

「まあったく素直じゃないねえ……アンタらしいっっちゃアンタらしいけどね。」

姿が見えないのをいい事に言いたい放題なマチルダ。殺してやりて

え、とバルバトスは思った。

「そんじゃ、旅の無事を祈ってるよ……一度と会うこともないだろうしね。」

「……ああ。是非会わないことを祈るぜえ。」

マチルダがそう言い、バルバトスもニヤツと笑って返す。その時、マチルダが微笑んだような気がした。

だが、それを言い終わると同時にマチルダの気配は消え、後には獣の鳴き声が響いただけだった。

「……………村の一員だったかどうか？ ………………気に入らねえ。」

そう呟いて、バスケット片手にバルバトスの体は暗い森の中へと消えていった。

「マチルダ姉さん、洗い物終わったよ。」

「ああ、ご苦労さんテファ。」

昼食の後、ティファニアは皿洗いを終えてテーブルを拭いていたマチルダに報告した。

「それにしても大変だねえ。皆の分の皿を洗うのも大変だろう？」

「大丈夫よ。これくらい慣れた物だから。」

気遣うマチルダに、ティファニアは笑顔で答える。それにつられてマチルダも笑顔になったが、ふと窓の外を見て少し顔を曇らせた。

「……子供達、やっぱりショックだったようだね。」

「……うん。」

マチルダの言葉に、ティファニアは笑顔を消して寂しげに頷いた。

朝起きれば、バルバトスの姿がないことに疑問を感じた子供達はティファニアに説明を求めた。ティファニアは包み隠さず、バルバトスは村を去ったことを話した。

予想通り、子供達は泣いてその事実を否定した。やっと仲良くなれたのに、突然の別れを子供達は認めようとしなかった。

中でも一番ひどかったのはエマだ。子供達の中で最も彼に懐いていたのはエマであり、あるうことが姉であるティファニアに何故止めなかったのかと泣き喚きながらポカポカと叩き出す始末。

だがそれを治めたのは、予想外にもジムだった。ジムも泣き腫らした顔になっていたが、子供達一人一人の頭を撫でて言った。

「バルバトスさんは、行かなきゃいけない所に行ったんだよ。だから、仕方ないことなんだ。わかってあげなよ。」

それでも子供達は納得することはなかったが、徐々に落ち着いていったのであった。

だがショックなのは変わらない。昼食を終えた今でも、子供達の多くはそれぞれの家に帰っていき、泣き続けていた。そんな中、エマは家には帰らず、広場に行つてバルバトスを待っていると言いつづけている。

「随分とまあ、慕われたもんだねえあの男も。」

今はいないであろうバルバトスに聞かれれば、怒つてその内容を否定しようとするだろう。マチルダはそう思いながら、皮肉を込めて言った。

（全く、こういつた環境を人一倍嫌っている奴に限つて慕われるんだから、世の中わかつたもんじゃないよ。）

寂しさを隠しきれていないティファニアを見て、マチルダはやれやれと内心ため息を吐いた。まあ自分はこの男が嫌いだったから何とも思つてはいないが、この状況はどうも耐えがたい。時間が経てば癒してくれるだろうが、できるだけ早い方がいい。そう考えたマチルダは、心機一転させようと立ち上がった。

「ほら、テファも落ち込んでないで。また前の生活に戻つただけだけだろ？ アンタは子供達の中ではお姉ちゃんなんだから、しっかりしな！」

「……うん、そうだね。」

母親のようにティファニアを叱咤するマチルダに、ティファニアは笑顔を見せた。それにマチルダもうんと頷いて、笑顔を返す。

「きゃああああああああああ!!」

だが、その笑顔は外から聞こえてきた悲鳴に凍りついた。

遡ること三十分前。

「……む。朝か。」

森の中、バルバトスがとりわけ太い木の根元で胡坐をかいて座り、目を覚ました。

夜通し歩き続けたが、考えてみれば森の抜け道はわからないままだった。かといって一旦村に戻って道を聞く、というのもも格好つかない上に癪だったので、適当に歩きまくっていたら案の定迷ってしまった。もうここどこなのかわからない状態。

仕方なく、夜が明けるまで睡眠を取ることにしたバルバトスは今に至る、というわけなのではあるが、打開策がない今、どうすればい

いのかわからないでいた。

「まったく、俺としたことがあ……迂闊だったぜえ。」

忌々しげに呟き、立ち上がってこれからのことを考える。まず最終目標は、カイルを殺すこと。それにはまず、元の世界へ帰るための手段を探さねばならない。

とりあえず人里へ行くことにしたのはいいものの、どこへ行けばいいのかわからない。いきなり詰まってしまった。

「……まあいい。歩き続ければいいだけの話よあ。」

そう言つて、バルバトスは歩き出す。

「……ん？」

だが、風が吹いて木々がざわめいた瞬間、再び足を止めた。見上げ、鬱蒼と茂った森の木々を見て、バルバトスは何かを感じ取った。

それは敵の気配、ではなかった。胸の中で沸き起こる、胸騒ぎ。

不吉な予感、というものを、バルバトスは感じたのだ。

「……何だというのだ……。」

疑問をそのまま口にし、バルバトスは眉をしかめる。今まで感じたことのない予感に、半ば戸惑った。

(……まさか、なあ……。)

ふと頭をティファニア達が過ぎった気がしたが、バルバトスはそれを振り払う。バカバカしい、と。

そして、その気持ちを振り払うかのように、バルバトスは歩み始めた。

真っ直ぐに。迷わず、その先へ。

「エマ!?!」

突如エマの悲鳴が聞こえたティファニアとマチルダは、尋常じゃない事態を予感して家を飛び出して広場へ向かう。そこには、信じがたい光景が広がっていた。

「おお、こいつぁ掘り出しもんが出てきたぜ?」

「やっぱ外れじゃなかったってことですかねえ頭?」

広場には数十人の汚れの目立つ軽装の鎧を着込んだ柄の悪そうなお見慣れない男達が立っていて、そのうち一人の腕の中で小柄の少女がもがいていた。

「エマ!」

「お姉ちゃん！！」

突然の事態に混乱するも、男の腕に抱えられている少女がエマとわかるとティファニアは悲痛な声を上げた。

マチルダは男達を見て、元々鋭かった目がさらに鋭くなり、怒りの炎を燃やした。そして杖を取り出すと、その先端を集団に向ける。

「アンタ達、その子を放しな！！」

マチルダの鋭い声が響き、杖を見て一部の男達が驚き、一步下がる。ハルケギニアにおけるメイジは、魔法の使えない平民にとって脅威の存在であった。

『平民は貴族に絶対に勝てない』、というルールがあるくらいである。いかに歴戦の戦士であろうと、メイジに打ち勝つのは難しいのだ。

そんな平民の男達にとって、突然現れたメイジに恐れをなした。

「へへ、姉ちゃん。悪いが、メイジの真似事は」

「『アーススピア』！！」

【ボゴンッ！】

中にはそれをはったりだと勘違いした男が歩み寄ろうとするが、突如地面から突き出た先端の細い岩塊によって腹部を強打し、油断していた男は痛みで悶絶する。

「誰がメイジの真似事してるって言った？ 悪いけど、こちとらこれで生計建ててんのさ。アンタら如きゴロツキに負けることはないんだよ。」

そんな男をマチルダは見下すも、その目には明らかな怒りが見え隠れしていた。妹が危険な目に合うならば容赦しないが、幼い子供達の手前、出血沙汰は控えたかったがために殺傷能力は抑えたのだ。

「さあ、全員怪我しなくなかったら大人しくその子を離しな。さもないと、全員串刺しにしてやんよ。」

今まで数多くの戦いを経験してきたマチルダは余裕を見せつけ、杖を手に男達を脅す。マチルダとしては、このままエマを離してから全員気絶させ、ティファニアの忘却の魔法を使わせて記憶を奪えば万事解決、と考えていた。

だが、その油断が仇となる。

「『エア・ハンマー』！」

「なっ!？」

当然男達が左右に別れたと思うと、その中心に立っていた男が叫んだ。そして男から透明の空気の塊が飛び出し、完全油断していたマチルダの腹部を撃ちぬいた。

「マチルダ姉さん!!」

「ぐっ…!!」

吹き飛ばされ、激痛によって口から血を吐き出すマチルダにティファニアは駆け寄る。アバラを折られ、動くたびに痛みを呻く。

「なるほどなあ。こんな何も無い場所にメイジがいるとは、さすが

に思ってもなかつたぜ。」

マチルダを攻撃した男は、ヘラヘラと笑いながら近寄ってくる。集団の中で一番凶悪な印象を受ける男だったが、その右手にある物を見て、マチルダは歯痒い思いをすることとなった。

「あ、アンタ……メイジ……！」

「そう。俺は風の『スクエア』メイジ。まもつとも、今は盗賊紛いのことばかりしてるならず者の集まりを率いている身だがなあ？」

リーダー格のようである男は笑みを崩そうともせずに関介する。

『スクエア』というのはメイジの強さを表す言葉で、最も最下層の『ドット』から『ライン』、『トライアングル』、として『スクエア』と分けられている。つまりこの男は、凄腕のメイジということになる。

対し、マチルダは『トライアングル』の土メイジ。実力は向こうの方が上だった。

「俺らはよお、この森に迷い込んだんだが、偶然この村を見つけてな？ まあ突然のことだったし、作戦も何もへったくれもなかったんだが……。」

ニヤアッと笑って、男は見回す。

「どうやらお前以外にメイジはいねえようだなあ？」

「……はっ！ どうだか、ね？」

余裕をかます男に、マチルダは血を拭いながら言い返す。もちろん、これはハツタリだ。ティファニアも魔法が使えるが、それは戦闘向

きじゃない。このハツタリが効果を出して、男が恐れて隙を出すのをマチルダは祈った。

「おいおい、ハツタリかましてんじゃねえぞ？ それだったら……。」

だが祈りは通じず、男は相変わらず笑いながら視線をマチルダから離す。

「ガキが出てくることなんて、ないんじゃないのか？」

「うああああああ！！！」

その視線の先では、一人の少年が男に向かって叫びながら突進してきたのが見えた。男は「おおっと。」と言いながらヒラリと避け、少年は急停止して男に向き直る。

「ジム！？」

「姉ちゃんに手を出すなあ！！！」

ティファニアとマチルダを庇うかのように少年、ジムが吠える。それを見た男は嘲笑った。

「はっはっは！ こいつあまた威勢のいいガキが出てきやがったぜえ！ なかなか高値で売れそうだ！」

それにつられ、他の男達も笑う。ジムはそんな彼らを見て、怒りの形相で睨む。

「まあ、お前には用はない。さっさとどけ。そうしたら命は助けてや」

「でやあああああ！！！！」

「ぐはっ！？」

男が言いかけた瞬間、ジムは油断している男の腹に向かって頭から突進する。日々バルバトスに体当たりをし続けてきたジムは、知らない間に力がついていたので。想像以上の力を受けて、男は呻く。

「このやろおおおお！！！！」

ジムは男に怒りをぶつけるかのように、渾身の力を込めて押し出す。

だが、男は戦いの場数をいくつも踏んだメイジ。ジムのような子供がただ闇雲に突っ込んでくるだけで勝てるわけもなかった。

「こ、の！！ 『エア・ニードル』！！！」

手にした杖に風の渦を纏わせたまま逆手に持って、から空きの背中に突き立てた。

「ぎゃあっ！！！」

「ジムっ！！！！」

肩辺りを深く刺され、ジムは痛みに男から体を離して倒れこみ、テイファニアは駆け寄った。

「ジム兄ちゃん！」

「皆、出るんじゃないよ！！！」

騒ぎを聞いて家を飛び出そうとした子供達だったが、マチルダが激痛に耐えながら叫ぶ。その様子を、男はヒュウと口笛を吹いた。

「ほお、こいつあかなり得したなあ。まさかガキだけの村なんざあ、宝の山みてえだぜ。」

「ガキは高値で売れますからねえ頭。」

男の背後で、エマを抱えた男が下卑た笑みを浮かべながら言う。人攫いを所業としている彼らにとって、子供というのは変態貴族の間では高値で取り引きされるといふのを知っている。男達にとって、子供は金にしか見えないのだ。

「クツ……アンタ達い……!!」

そんな彼らに向けて、マチルダは痛む体を抑えながら杖を振ろうとする。

「おおっと動くなよお？ こいつがどうなってもいいのか？」

「うっ……!!」

だが、男が倒れたジムの頭を踏みつけてその行動は阻止された。杖を持つ手を震わし、マチルダはギリリと唇を噛む。

「く……この……!!」

杖を下ろしたマチルダを見て、男は優越感に浸る。男は根っからのサディスティックだった。

「まあ、このガキにはちょっつと痛い目みてもらわねえとなあ……

俺に恥かかせた罰だ、多少どっか折れても問題ねえよ、なあ！！」
「！ や、やめ……！」

踏んでいた足を振り上げて、男はジムを蹴りつけようとする。エマは目を閉じ、マチルダは声を張り上げようとした。

「やめてえっ！……！」

だが、マチルダより早くティファニアが叫び、男は驚いて動きを止めてティファニアを見た。ティファニアはあらん限りの声で叫んだせいで肩で息をし、そして涙ながらに膝を着いた。

「お願いです……もう、子供達やマチルダ姉さんを、傷つけないでください……。」

ティファニアは、咄嗟に使おうと思っていた杖を男の前に投げ捨て、降伏の意を示した。

「私はどうなつても構いませんから……どうか、私以外の人に危害を加えないでください。」

「て、テファ、アンタ何言つて……！！？」

ティファニアの降伏宣言に、マチルダは驚愕する。ジムも痛みには呻きながらも、ティファニアに止めるよう懇願するような視線を送った。

「ほお、つまり、お前自身はどうなっても構わない、と？」
「……はい。お願いします。」

恐怖で震えるも、強い意思で男を見るティファニアを、男はティファニアの体を舐めるように見る。他の男達も同様、下心を隠そうともしない。それらから感じる嫌悪感に、ティファニアは必死に耐えた。

「ヒヒヒ、随分と健気なお嬢ちゃんだぜ。お前みたいな別嬪をこんな村に置いとくなんて、勿体ねえぜ。」

グイとティファニアの腕を掴んで強引に立たせ、舌なめずりする。顔を近づける男に逆らうように、ティファニアは顔を背けた。

「いいだろう……だがその前に。」
「キャッ！」

男はブン、とティファニアを投げ飛ばし、ティファニアは地面に倒れこむ。立ち上がるうと顔を上げると、そこには自分を下卑た笑みを浮かべる男が立っていた。

「ジミー。お前確か溜まってるって言ってたよな？ ……その女の味見は譲ってやるよ。」
「あ、ありがてえ………！」
「ヒッ……！」

ジミーと呼ばれた男は、乾燥して汚れた唇をジュルリと舐めてティファニアを前にしゃがみ込んだ。

「や、やめろ！ その子に手え出すんじゃないよ……！」

「おいおい、あれはあの女が自分から進んで選んだことだぜ？ それを止めようなんて、野暮なことはやめろよな？」

叫ぶマチルダに、男はしゃがみ込んでニヤニヤ笑いながら囁く。

「まあ待つてろよ。あの子が終われば、次はお前さんだからよお？」

「！？」

その言葉の意味を理解したマチルダは、怒りで顔を歪めた。この男達は、ティファニアの訴えを無視しようとしているのだ。ティファニアを汚した後、次は自分のみならず村の子供達にまで毒牙を向けるのだろう。

あまりに卑劣、あまりに外道。マチルダは油断した自分を深く悔いた。

「お姉ちゃん……お姉ちゃん……！！！」

男に未だ抱えられているエマは、ティファニアが汚されようとしているのをただ見ているしかできなかった。

「ヒヒヒ……大人しい顔して、随分やらしい体してんじゃねえか……そそるぜえ……。」

ジミーは嫌らしく涎を垂らしながらティファニアの顎を掴んで至近距離まで顔を近づけ、臭い息をティファニアに吹きつけ、思わずティファニアは顔を逸らそうとしたが、強引にまた顔を向けさせられた。

「まさかお前、初物かあ？　ますますそそるじゃねえか！」

「ぎゅぶるっ!?!」

空気を揺るがす咆哮、そして森をも揺らす凄まじい衝撃が鳴り響くと同時に蒼い影が突然飛び出したかと思うと、ティファニアに覆い被さったジミーの体は吹き飛ばされた。

その威力は、ダンプが最高速度でぶつかってきたそれよりも遙かに上回る。その直撃を受けたジミーは、何が何だかわからないうちに体の臓物と骨と肉をごちゃまぜにして吹き飛ばされ、森へと飛んでいく。森の木々を何本も吹き飛ばし、二十本を超えた時点でようやく止まり、哀れな肉塊となってその命を散らした。

「な、なんだあ!?!?!」

突然の展開に、男は冷静さを保てず慌てる。他の男達だけでなく、ティファニアも、マチルダも、ジムも、エマも、何が起こったのかわからなかった。

やがて土煙が晴れていく。ティファニアの前に立つその姿は、他の男達よりも遙かに背丈が高く、先ほどの攻撃の余韻が残っているマントはバタバタとなびく。

男達は、いきなり現れたその人物が何なのかわからず呆然とする。

だが、その正体を知る人物達は、驚き、そして歓喜した。

「バルバトス……さん。」

「バルおじちゃん!!」

ティファニアとエマがその男の名を呼ぶ。当のバルバトスは、先ほどバルバトスが最も得意とする突進、『イビルチャージ』で吹き飛

ばしたジミーが吹き飛んだ方角さえ見ることなく、前方で浮き足立つ男達に、鬼さえ恐れるような凄まじい形相を向けた。

「貴様ら…こんなところで何をしている…?」

地獄から響くかのような声で威圧し、左手に持つ禍々しい斧、『デアボリッククファンク』の先端を突き出し、宣言する。

「鼠のように逃げおおせるか！ この場で死ぬか！！ どちらか選べええいつ！！！！」

そこから発せられる、凄まじい殺気。バルバトスの体から紫色のオーラが立ち昇り始め、それを目の当たりにした男達は恐怖した。ティアファニアは立ち上がると、今の際に倒れているジムとマチルダを回収し、安全な位置まで下がる。

「ひ…怯むな！！！ どんな奴だか知らねえが、所詮は一人だ！！ 困んでぶつ殺せえ！！」

リーダー格の男が叫ぶと、男達は得物を手に一斉にバルバトスを囲む。それを一瞥し、バルバトスは斧を持ち上げるような構えを取った。

「さあ、来いよ！ 貴様ら全員、微塵斬りにしてやるぜ！！！！」

バルバトスはその言葉を皮切りに、一人に向けて走り出す。男は、その巨体に見合わない速さで接近してくるバルバトスに反応できなかった。

「うおるりやあー!!」

「ぎゃあああ!?!」

豪快に斧を地面に叩きつけ、男の体を真っ二つに割る。

「ずおるりやああー!!」

「ぐええええ!!」

「ぎっ!?!」

さらに斧をスイングし、横にいた二人を両断して切り捨てた。その戦い方に、型はない。ただ斧を“豪快に振り回しているだけ”である。だが、その斧から生み出される圧倒的な力と殺意の前に、どのような型もはや通用しない。ただ殺すためだけに振るうその戦い方に、男達は本格的に恐れを抱き始める。

「う、うわああああー!!」

槍を持った一人が、無謀にもバルバトスへ突進する。だが、バルバトスはその矛先を掴むと、強引にへし折った。

「な、俺の槍が…!?!」

鉄製の槍が折られ、男は呆然とする。だが、それが仇となり、斧を両手に持って下段に構えたバルバトスに反応できなかった。

「今死ねっ!!」

【ズアッ!】

下から振るわれる斧に男は吹き飛び、

「すぐ死ねっ!!」

【ズゴオンッ!】

どういう原理か大地を砕く程の力強い足踏みと同時に落ちた落雷に焼かれ、

「骨まで碎けるおおっ!!!」

【ズグアッ!】

踏み込みと同時に旋風を巻き起こす袈裟斬りによって槍を持っていた男は文字通り骨ごと碎かれて血を撒き散らしながらバラバラに吹き飛び、脅威の破壊力を持つバルバトスの連続攻撃、『三連殺』の最後の攻撃の余波によって二人の男は吹き飛ばされ、絶命した。

「ひっ……!! く、来るな!!」

それを見て恐慌状態に陥ったエマを抱えた男は、短剣を引き抜いてエマに突きつけて人質にして停止させようと試みる。切っ先鋭い短剣を見て、エマは目を見開いて怯える。

だが、バルバトスは止まらない。そんな男を嘲笑うかのように、斧を突き出した。

「屑があ!!」

バルバトスが叫ぶと、男の足元が黒く変色し、そして、

「『凶刃のシャドウエッジ』!!」

【ズバアッ!】

そこから飛び出した、禍々しい装飾の槍によって男は体を横に分断される。

闇系晶術の初歩、『シャドウエッジ』。その刃は闇の瘴気を帯び、掠っただけでその力が体の自由を奪う。

力の抜けた腕からエマは抜け出し、転がるようにティファニア達の下へと駆け寄った。

「エマ！ 大丈夫！？」

「お姉ちゃあん！！！」

恐怖から開放されたエマは、ティファニアに抱きついて泣き出す。だが、残された男達の恐怖は終わらない。

「な、何だ今のは！？ 先住魔法か！？」

「チクシヨウ！ こ、こんな奴に勝てるわけねえ！！！」

完全に戦意を喪失した男達は、逃げ腰になってバルバトスから離れる。

だが、彼らのような軟弱な精神を持ち合わせてる人間をとにかく嫌うバルバトスにとって、それは情けが湧き起こる物ではなく、逆に怒りが湧かせてしまうのだった。

「縮こまってんじゃあねえっ！ …… 『灼熱の』オ！！！」

バルバトスが斧を天空に掲げると、何も無い虚空から炎の渦が生まれた。

「『バーンストライク』 ツッ！！！！！！！」

【ズドドドドオオン！！！！】

渦の中央から飛び出してきた巨大な火炎弾が残った男達を焼いている。男達は悲鳴も上げれず、その業火に己の身を焼かれ、骨一つ残すことなく灰となって消えていった。

炎系晶術、『バーンストライク』。中級に位置しているが、バルバトスが使用するそれは同系統の上級晶術にも並ぶ威力となっている。圧倒的なまでの破壊力に、その光景を離れた位置で見ていたリーダー格は言葉を失う。

（何だこれは？ 何だこれは？ 何なんだこれは！？）

すでに先ほどの余裕はない。斧を振るえば手下は吹き飛び、妙な術を使えば何が起こったのかわからず殺されていく。男の中を支配するのは、恐怖以外になかった。

「さあああ……残すは貴様だけだなあ？」

「！！！！」

男はバルバトスの鋭い眼光に睨まれ、周囲を見回す。あるのはかつての手下達の無残な姿。ある者は両断され、ある者は切り刻まれ、ある者は潰され、ある者は骨さえ残さず灰のみになっていた。

最早残っている者は自分一人。男は後悔した。自分達は宝の山を見つけたのではなく、あの世への入り口を見つけてしまったのだ。

だが、男にはまだ勝機があった。今までも、これを使って切り抜けてきたのだ。今使わないでいつ使うというのだ。

「ク、ククク……！ バアカめえ！ テメエの相手が俺一人だけだと思っな！！」

男は啖呵を切り、杖を振って呪文を唱え始めた。

「『ユビキタス・デル・ウインデ……』。」

呪文を完成させた男の体が、まるで風で霧が揺らぐようにブレ始める。やがてその体は分裂を始めた。

一人、二人、三人……五人に増えたところで、男の体は元に戻る。男本体を合わせて、計六人がバルバトスを囲みこんだ。

「偏在……！」

それを見たマチルダは驚いて声を上げた。

「へへへ、そうさ。俺は風の『スクエア』。風の偏在ユビキタスを作り出すな
んざあ楽勝なもんさ。」

自分の勝利を確信した男は、再び余裕を取り戻してバルバトスを嘲笑う。それに反応せず、バルバトスは分身した男達を見回す。

「さあ、今謝れば楽に殺してやるぜ？ どうする？」

完全に上の立場に立ったかのような物言いの男に、バルバトスは不快を隠そうともせず、歯を剥き出した。

「テメエのような軟弱者にい、俺が謝るかどうか？ ……相当死にてえらしいなあ貴様あ……！！！」

「……死ぬのはお前だよこのデカブツが。そんなに逝きたいなら、さっさと逝かせてやらあ……！！！」

バルバトスの挑発に、勝った気でいる男は腹を立てて偏在達に魔法を唱えさせ、自身もありつたけの精神力を使って魔法を唱え始めた。

「死ねえ!!! 『ウインドブレイク』!!!」

「『エア・ハンマー』!!!」

「『ライトニングクラウド』!!!」

「『エア・カッター』!!!」

「『カッター・トルネード』!!!」

「『ウインドボム』!!!」

各々それぞれ違う風系統の魔法、けれど殺傷力の高い魔法を一斉にバルバトスに叩き込んでいく。バルバトスがいた場所は爆発し、土煙が立ちこめて視界を遮られた。

「バルバトスさん!!!」

「おじちゃん!!!」

ティファニアとエマが、バルバトスの安否を気遣って叫ぶ。男は、勝利を確信した笑みを浮かべて土煙を見つめた。

「それで攻撃のつもりかあ？ この軟弱者があ…。」

「!?!? なっ!?!?!?」

だが、煙が晴れると、そこにいたのは全くの無傷のバルバトスが獐猛な笑みを浮かべながら立っていた。

男は信じられなかった。あれほどの魔法の直撃を受けて、無傷だなんて！ 夢だと思いたかった。だが、バルバトスから発せられる殺

気が現実だと教えた。

「や、やれえ!!! 殺せえええつ!!!!」

ならば接近戦だと、白兵戦に持ち込んだ男は偏在達に魔法により接近攻撃を仕掛ける。ジムを刺した『エア・ニードル』の強化版、『エア・スピア』を、バルバトスに向けて突撃していく偏在達。対し、ニヤリと笑ったバルバトスは右腕を振り上げ、地面に振り下ろす!

「貴様に朝日は拜ませねええつ!!!!」

【ズグオオオンツ!!!】

右の拳を地面に叩きつけると、バルバトスを中心に紫色の毒々しい光が巻き起こり、偏在達を飲み込んだ。毒の鬨気を周囲に発生させる『ポイズニック・ヴォイド』をモロに食らった偏在達は、その身を風に還され、消滅した。

「ひ、ひいいいっ!?!」

自らの切り札を一瞬で消され、男は完全に戦意を喪失した模様。この男には絶対に勝てない。逃げよう。地の果てまで逃げおせよう。そうと決まると、杖を振ってコモンマジックと呼ばれる基礎飛行呪文、『フライ』を唱えて空中に飛び上がった。精神力の続く限り飛び続けるつもりだ。

バルバトスは空を飛べない。そう踏んだ男は、森の上空まで飛び上がって安堵した。

だがそれでバルバトスが諦めると思った時点で、その男の運命は決

まっていた。いや、そもそも村を襲った時点で男の命は無くなっていた、というべきだろうか。

「男に“後退”の二文字はねえ……！！！」

斧を持ち上げ、先端を男が逃げた方角へと向ける。そしてその先端にバルバトスの鬨気と殺意をみなぎらせ始めた。

やがて斧の刃を包むかのようにオレンジ色の炎のような物が揺らめき始める。それは徐々に大きくなっていき、ついには放電を始める始末。

狙うは、愚かな軟弱者。弱者のくせに弱者を襲い、圧倒的優位に立っていれば付け上がり、いざ強者が現れば、己の保身のために背を向けて逃げ出すような虫けら。

バルバトスは、斧に殺意を、鬨気を、そして怒りを込め、叫んだ。

「死ねえい！！ 『ジエノサイドブレイバー』 アアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

【ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！！！！！！！！！】

斧から放たれた、極太のオレンジ色の閃光『ジエノサイドブレイバー』。閃光は森を焼き尽くし、真っ直ぐと標的目掛けて飛んでいく。

「え…………ひ、ひぎゃああああああああああ……………
……………！！！！！！！！！！」

背中から迫る圧倒的な殺戮に、男は振り向き驚き、そして恐怖に、絶望に、その身を焼き尽くされ、断末魔の悲鳴さえも言い切れずに途切れ、男の魂は地獄へと落ちていった。

「フン…………今日の俺はぁ紳士的だ。運がよかつたな。」

破壊された森の先を見て、バルバトスは斧を下げて冷たく言い放つ。バルバトスからしてみれば、あれで手加減をした方なのだ。彼の本気の殺意を受けた者は、その恐怖に凍りつく暇もなくその身を散らすだろう。

ゆえに、今日の自分は紳士的だ、と言い放つたのだった。

バルバトスの圧倒的な蹂躞を一通り見ていたティファニアとマチルダは、その光景に啞然とした。エマはティファニアに抱きかかえられてその一部始終を見ることはなく、ジムも痛みに見る暇もなかった。だが、見ないで正解かもしれない。

バルバトスはティファニア達の方を向く。その顔には、気遣い等の物は無く、ただ無表情で何も映していない。

「バルバトス…………さん…………。」

ティファニアは立ち上がり、バルバトスへ歩み寄ろうとする。が、バルバトスは懐から何かを漁ると、それをティファニアに投げつけた。

ティファニアはそれを慌てて受け取る。目を落とすと、そこには夜
の間にバルバトスに弁当として渡したバスケットがあった。

「俺にそんな邪魔になる物はいらん。余計なお世話だ。」

スツと身を翻し、冷たく言う。

「……オイ、質問がある。」

「え……あ、ハイ。」

突然バスケットを放り渡され邪魔発言され、ショックを受けていた
ティファニアだったが、バルバトスの声を聞いて我に返った。

「ここから人里へは、どうやって出る？」

「え……？」

「……どうやって出るかって聞いてんだろが!!」

「は、はい!!」

怒鳴られ、ティファニアはビクリとするも、森から抜ける道を教え
た。

「抜けたら、街道に出ます。そこから北へ行けば『シティオブサウ
スゴータ』という街に、南へ行けば『ロサイス』という港町へ行け
ます。」

「フン、それだけ聞けば十分だ。」

「! ま、待つてください!!」

そう言って、バルバトスは歩き出す。ティファニアは慌てて呼び止
める。バルバトスは足を止め、僅かに振り向いた。

「…どうして、戻ってきてくれたんですか……？ あなたにとって、私達は……。」

ティファニアは、消え入りそうな声で聞く。

わかっていたのだ。バルバトスが、自分達のことなど単なる弱者でしか見ていないということに。守るに値しない者であることを、ティファニアはわかっていた。

それを見越したかのように、バルバトスは鼻を鳴らす。

「…俺が戻ってきたのはあ、ただ単にそのバスケットを返しに来たことと、道を聞くのを忘れていたから聞きに来ただけにすぎねえんだよう……助けたのは、気まぐれでしかない。」

そう言い終えると、バルバトスは歩き出す。今まで黙っていたエマは、慌てて追おうとした。

「行かないでバルおじちゃん！！ ずっとここにいてよぉ！！」

叫ぶエマを、ティファニアはそっと押し留める。それでもエマは、ティファニアの手をどけようと必死に抗った。

「……ああ、そうだ。貴様らに言うておくことがある。」

「……？」

再び立ち止まり、バルバトスはティファニア達を横目で見て、言った。

嬉しそうに言ってから、ティファニアはそっと、深く頭を下げた。その行動には、バルバトスに対する感謝と、旅の無事を祈る意味合いが込められている。

それを見て、エマもバルバトスの方に向かって頭を下げ、ジムも肩を抑えながら立ち上がり、その頭を下げた。

今まで隠れていた子供達だったが、おずおずと出てきて全員ティファニアの周りに集まり、バルバトスが去った方へ向かってティファニアの真似をして頭を下げていく。

そんな光景を見たマチルダは、ふう、と一つため息を吐いて、思った。

（まあったく……ホント、アンタみたいな奴が慕われるなんて、どうかしてるね。）

嫌みったらしく、しかしどこか心地いい気持ちになったマチルダも、形だけでも思っ、横になりながらも頭を下げるのだった。

森を抜けたバルバトスは、『港町ロサイス』へ向かって足を進める。距離まではわからないが、道さえわかれば距離などどうということはない。

因みに港を選んだ理由は、北とか南とか、どつちなのかわからなかったせいである。まあ人里ならばどつちでもいいという考えであったので気にはしていない。

「まったく、ここまで来るまでに随分と時間を掛けちゃったもんだぜえ……。」

毒づき、歩む足を止めないバルバトス。その心中は、これから始まるカイルへの復讐を果たすまでの旅、そしてその道中に出会うだろう強敵に対する期待により、バルバトスは自然と胸が躍るのを感じていた。

「……クク……この世界は俺の渴きを満たすことができるかあ……ワクワクしてきたぜえ……！」

バルバトスは笑う。獰猛に。凶悪に。高鳴る胸を抑えつつ、バルバトスは足を進めた。

「……………」

ふと、バルバトスは懐を漁り始める。やがてそこから出てきたのは、萎んだパンだった。

そのパンは、ティファニアが以前、村を出る前に渡された弁当の中にあつたパンの一つ。その中から“一つだけ残していた”のである。パン一つだけしか入っていないバスケットなど不要の物だと判断したバルバトスは、荷物の邪魔になると判断してティファニアに返した。

「……………」

しばらくそのパンを見つめていたバルバトスであつたが、やがておもむろにパンを口に放り込み、エマに初めて注意された時のようにモグモグと咀嚼し、ゴクリと飲み込んだ。

「……相変わらずしけた味してやがる……。」

口の中に残るパンの甘味と小麦の香りを感じつつ、バルバトスは口サイズに向かって歩いていった。

それから、一年の月日が流れた。

< 4 > (後書き)

次回最終回。

「……さすがに改めて見てみると多いな。」

「はっ。さすが五万の大軍というだけありますな。」

アルビオン王家の皇太子、ウェールズ・テューダーは、最後の砦ユークアスル城の一室から眼下を望み見えるテラスの手すりに手を着き、凜々しい眉を顰めた。傍に控える老いてもなお現役の側近、パリーも同様の表情を浮かべた。空には明るく輝く双月が見え、城を照らす。

その視線の先には、夜によって暗闇の中を埋め尽くさんばかりの明りが見える。月明かりによってその全貌はより鮮明に見えていた。中には、人間だけでなく巨人、トロール鬼や、火を噴く火竜も確認できる。

彼らは、ウェールズ達王室に仕える者達ではない。いや、以前は仕えていた。

だが、彼らは貴族派を名乗り、『聖地を奪還する』という思想を掲げて結成された反乱軍、『レコン・キスタ』。俗に言う裏切り者となり、こうして王室に牙を向いていた。

相手は五万、対し、こちらは三百という圧倒的な力量に、王室の者達は最初こそ絶望に打ちひしがれていた。だが、それでは長年アルビオン王家に仕えてきた誇りが廃る。

そう思い、今宵は皆飲んで騒いで、明日に控えた戦いでは、決死覚悟で挑むつもりで明るく振舞い続けたのだ。

「……だが、やはり明日死ぬとなると、寂しいものだな。」

「……ご心情は、お察しします。」

だがウエルズでもやはり恐いものは恐い。明日死ぬとわかっていて恐怖しない者は、生を望む者にはいないのだ。パリーも家族を残して自分が死ぬことに悲しみの念を抱く。

ウエルズは、そつと懐から手紙を取り出す。それは、昼間にトリステインからの大使と名乗った少女から手渡された、一通の手紙。そこには、ウエルズが愛すべき存在である従姉妹から政略結婚するという報告と、その従姉妹から送られた恋文を手渡すようにという頼み、そして亡命を勧める一文が書かれてある。

彼は、大使である少女に亡命を必死に勧められた。だが彼は亡命を断った。皆が死ぬのに、王族である自分だけ逃げるなどできないと言いつ張った。少女が泣きそうな顔になったのを見てつらい気持ちにもなったが、それは覆ることはない。

だが、最後に一度だけ、愛しい人に会いたかった。それがウエルズを唯一縛る重石となる。

（せめて君ともう一度、あのラグドリアンの湖畔を、共に手を取り合って歩みたかった……アンリエッタ。）

手紙を愛しげに抱き、ウエルズは目を閉じて最愛の人の花のような笑顔を思い浮かべる。自然と、目から涙が零れ落ちた。

【ズウウウウン……！】

「!? 何事だ!？」

突然、轟音が響き渡り、ウェールズは我に返って叫ぶ。

「し、下です！ 敵軍から聞こえてきました！」

ウェールズは月明かりを頼りに、音の正体を確かめようとテラスから身を乗り出した。

敵陣の中心に、もうもうと煙が立ち込める。突然の出来事に、突撃を待っていた兵士達は混乱し、目の前の煙を警戒する。

「フハハハハハハハハハハアツ!!! これだ！ これこそが！
戦場よおおおお!!!!!!」

怒号のような笑い声が響いた瞬間、兵士達は驚いて完全に動きを止めた。

煙が晴れる。

そこに立っていたのは、斜めに黒い刺繍が入った己の筋肉を誇示するかのような服と、背中から流れるように羽織った若草色のマントに、青い髪に褐色の肌をした、巨大な戦斧片手に仁王立ちした大柄

【ドオンドオン！】

「ぐえー！！」

二連続の雷を伴った踏みつけ、『トランプル』により、その者は文字通り潰れ、果てた。

「く、クソお化け物めえ！

「これでも食らえ！！」

体勢を立て直した一部の兵士達は、魔法を一斉に放つ。火球が、風の刃が迫る。

だが男はそれを嘲笑うと、斧を振り下ろす。

「どうりやあああああ！！！」

【ズドオン！！】

振り下ろされた斧によって大地は砕かれる。だがそれに留まらず、殺意を持った衝撃は地面を走り、魔法の攻撃を消し去る。さらにそのまま、魔法を撃った者達を捉えた。

「「ぎやあつ！！！！」」

遠距離攻撃、『殺・魔神剣』を食らった兵士達は粉微塵になり、その命を散らす。

男はそれを見届けることなく次へ走る。炎を纏った斧を振り上げ、一気に振り下ろす！

「死ぬかあ！！！」

【ドオン！】

炎による爆炎を伴った斬撃、『轟炎斬』により何人も兵士が体を燃やし尽くされ、

「消えるかあ！！」

【ギョオオン！】

竜巻を巻き起こす斬り上げ、『斬空断』で幾人も兵士達を空中にいたドラゴンもろとも切り刻みながら巻き上げ、

「土下座してでも生き延びるのかあっ！！！！」

【ズウウンッ！！】

トルル鬼のうち一体を引つ掴んで腹を膝で蹴って怯ませ、一思いに地面に叩きつけて敵をトマトのように潰す『裂碎断』によって発生した衝撃波で周囲の敵を吹き飛ばす。

まさに“三”回“連”続で振るわれる“殺”戮。

属性付き『三連殺』を使っただけで、何百もの命が露と消えていく。もはやそこには、情けや容赦といった物は存在しない。そこにあるのはただただ一方的な虐殺劇のみ。

「な、何なのだ彼は……化け物か！？」

凄まじいの一言につきるその光景に、ウェールズは驚愕の声を上げる。メイジの魔法など子供の遊戯に等しいと言わんばかりに、敵を

次々と屠っていくその男に、ウエルズは今まで生きてきた中で一番の恐怖を覚えていた。

ここまでメイジなど齒が立たない男を、彼は知らない。かの始祖ブリミルでさえ、裸足で逃げかねない、圧倒的な物がその男にはあった。

だが、ウエルズはボーっとしている暇はなかった。あの男のおかげで、活路を開くことができた。急いで傍で同じく呆然としているパリーに命令する。

「急ぎ出陣の準備をしろ！ この好機を逃すな！！」

「！ はっ！！」

恭しく礼をすると、パリーは急ぎ伝令を飛ばしに駆けて行った。

ウエルズは再び、暴れまわっている男を見やる。斧を振るい、血を巻き上げているその姿は、歴戦の残虐な戦士に相応しい姿だった。

「……名を知らぬ猛者よ。あなたの戦い方はいささか残虐過ぎるが、そのたつた一人果敢に挑む姿……賞賛に値します。」

ウエルズは眼下で繰り広げられる殺戮劇に、畏怖の念を抱きながらも、彼なりの賛辞の言葉を送ったのだった。

「『圧殺のエアプレッシャー』っ！！！！」

地系中級晶術『エアプレッシャー』によって発生した強烈な重力をその身に受けて挽肉へと化して凹んだ地面へと沈んだ兵士達を尻目に、男は未だ戦意のある者達が固まる一団に目を向ける。その目に

は疲れは全くなく、寧ろまだまだ遊び足りない子供のように目を光らせる。

「いいぞお！ それでこそ！ 殺し甲斐があるというものおっ！！」

斧を頭上に掲げ、男は叫んだ。

「くらええい！！ 『断罪のエクセキューション』！！！！」

途端、上空に暗雲が立ち込め、巨大な魔法陣が上空に、もう一つ、同じような大きさの魔法陣が地上に描かれ、そこから闇の炎が噴き出る。それに巻き込まれた兵士達は悲鳴を上げながら飛び上がり、その身を焼かれていく。

【ズドオオンッ！！】

締め、二つの魔法陣を挟んだ中心から暗黒の雷が落ち、焼かれていた兵士となんとか難を逃れていた兵士をも巻き込んで、魂ごと粉々に砕け散り、分子レベルへと分解された。

闇系晶術の中でも最上位に位置する上級晶術、『エクセキューション』。まさに暗黒神の裁きの如くその雷に身を焼かれし者は、魂ごと抹消され、存在を消される。

完全に恐れをなして、五万いた軍隊は一気に四百までに減り、トール鬼もドラゴンもありえない強さを持つ男に本能的恐怖を覚え、兵士達と共に遂に敗走を始める。だが、男はそれを許さない。

「怖じ気づいたか、この軟弱者があああああつ！！！！！！」

背を向けて逃げ出す彼らに、男は斧を振るいながら疾走する。その速さは、空を飛ぶドラゴンなど足元にも及ばない。

「貴様らの死に場所はあ……ここだあつ……!!!!」

【ズウウン……!!】

走りながら斧を地面に叩きつけ、巨大な亀裂を発生させる。斧の衝撃波に巻き込まれた者達はバラバラになりながら吹き飛び、突如発生した地割れによつて足元を失つて悲鳴を上げながら落ちていく者もいた。

だがそれだけで終わらない。

「ここだつ……!!」

【ギュオンツ……!!】

「ここだつ……!!!!」

【ズオンツ……!!】

「こおこおだあああああああああああ……!!!!!!」

【グオオオオオオン……!!!!】

三度振るわれた斧の凶刃から放たれる巨大な真空刃によつて、人間ドラゴン、トルル鬼関係なくその身に受けた者は皆バラバラを通り越して粉微塵になり、血を残して消えていく。かろうじて生き残つた者は、体の一部分を失いながらも必死に逃げようとし、奇跡的に無傷だった者達は振り返ろうとせず、倒れた仲間達を助けることもできず、ただ逃げ出すことしか考えてなかった。

もはや軍隊とは呼べない程にまで減つた敵軍に、男は哀れと思……

振り下ろされた斧の柄が伸び、地面に突き刺さると、斧の中に宿っていた強大な力が解放されて深紅の光が爆発する。その技によって、逃げていた兵士達は全て巻き込まれていき、悲鳴を上げることなく消えていく。

それだけに留まらず、草木も花も、何もかもを巻き込んで、男の闘気が爆炎となって全てを消し去っていく。

まさに『ワールドデストラロイヤ世界破壊者』に相応しい威力。

やがて光が納まると、そこには巨大なクレーターがあるだけで、逃げていたはずの兵士達は跡形もなく消えていた。ドラゴン、巨人、関係なく。五万いた軍隊は、一人残らず全滅した。

広大な草原に、ぽつかりと巨大な穴が開いたような光景が完成された。

「フハハハハハッ！！　ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！」

唯一戦場に立っていた男は、もはや生命の気配が感じられない草原で一人笑う。愉快に、獰猛に。

「貴様らはあ、俺の最高のオモチャだったぜえ……！！」

誰に言うでもなく、男は歯を剥き出し、嬉しそうに言うのだった。

アルビオン首都ロンディニウムから南にある港町ロサイス。そこにある赤レンガで建てられた発令所にある部屋の中で一際広い部屋の中央で、レコン・キスタ総司令官であるクロムウエルは、自身の力一ルした金髪を撫でつつ豪華なイスに座っていた。周囲には屈強なアルビオン騎士が杖を手に襲撃の警戒をしている。

クロムウエルは、この戦争に勝利を確信していた。今彼の手には、一つの指輪は嵌まっている。

『アンドバリの指輪』。死者に偽りの命を与えるマジックアイテム。それだけでなく、その魔力を使って生きている状態の者も操れるという優れもの。

今回、彼はこの指輪の力を利用して、自身を伝説の系統、『虚無』を名乗ったおかげで、一介の司教に過ぎなかった彼がここまで地位を登りつめ、貴族派を纏め上げてこうして王族と戦争をしかけることができたのだ。今のところ、結果は上々。もはや勝ったも同然と言わんばかりの戦力に、クロムウエルは小躍りしそうになった。

そして今、彼は作戦の結果を心待ちにしていた。その作戦内容というのは、『開戦時刻より早く城に攻め入り、油断しきっている王室の者どもを根絶やしにする』という、実に卑怯極まりない、誇りもへつたくれもない物だった。

今の王室は倒壊寸前。そこへ油断してる隙に攻め入ったらどうなる？ おもしろいように敵を倒していけるに違いない。

「伝令はまだ来ないのか？」

「はっ。しばしお待ちを。じきに伝令の者が戻ってまいります。」

クロムウエルは吉報を心待ちにし、傍に控えていた騎士に問うた。

すると突然、謁見の間の扉が開け放たれ、一人のやせた男が慌てて駆け寄り、クロムウエルの前で膝を着いた。それを見て、クロムウエルはようやく来たかという思いと同時に吉報に期待してワクワクク

しました。

「も、申し上げますクロムウエル様!!」

「慌てなくともよい。まずは落ち着きなさい。」

伝令があまりに焦っているように見えるのは何故なのか気になったが、それはおそらく、なんとか早くよい戦果を報告したいがためだろうとクロムウエルは思った。

だが、次に出た言葉にクロムウエルは啞然とすることになる。

「に、ニューカッスル城前に展開していた我が軍は全滅! 王党派の者達が準備を終え、ロサイスへ進軍中です!!!」

「な、何い!？」

クロムウエルは予想外な報告に驚き、立ち上がった。その顔には冷や汗が流れ出ている。他の騎士達も、己の耳を疑った。

「何を言うか! あれだけいた軍隊が全滅だと!? 作戦は!? 損害は!？」

「そ、それが……作戦開始前に、正体不明の人間が現れ……文字通り、我が軍は一人残らず……。」

「ひ、一人残らずう!?! て、敵は!?! 敵は一体、どれだけの戦力を投入してきたというのだ!?!」

まさか王党派に未だ隠れていた軍隊がいたのかと思っただクロムウエルは、次の言葉に完全に言葉を失った。

「ひ……一人、です。」

「……は?」

「一人です！！ たった一人で我が軍を壊滅させました！！！」
信じがたい報告である。五万の軍が、たった一人によって全て葬られたというのだ。誰も彼も、その報告を信じるはずがなかった。

だが。

【ズウウウン！！】

「何事だ！？」

突然発令所が大きく揺れ、門に控えていた兵士が叫ぶ。そして、またバタンと扉が開いて一人の騎士が飛び込んできた。

「も、申し上げます！ お、斧を持った巨大な男が、ロサイスに展開している我が軍の天幕を次々破壊し、こちらに迫って来ています！！！！」

「な……！？」

信じられない惨敗結果に、今度は襲撃者。クロムウエルは頭の中が真っ白になった。

「ま、まさか、五万の軍隊を葬った張本人では……。」
「バカを言うな！ そんなことあり得る物か！！」

騎士達は互いに口論し、その事実を否定しようとする。その間にも、クロムウエルは頭に被った帽子がズリ落ちてくるのを感じつつも、直す余裕はなかった。

「ク、クロムウェル様！　ひとまずここは避難を！！」

騎士の一人がクロムウェルに近づき、慌てて脱出を促す。

だが、もはや遅すぎた。

「ぶるああああああああああああああ！！！！！！」

【ズドオオン！！！！】

耳を劈くような咆哮と共に轟音をたてて扉もろとも壁が吹き飛び、門の傍にいた兵士は瓦礫に押しつぶされて絶命した。

やがて砂塵の中からゆっくりと巨躯の影が部屋に入ってくる。煙が納まると、その恐ろしい全貌を曝け出した。

青い髪をした、厳つい顔をした大男は、その左手に持った斧を振るってニイッと笑う。

「貴様かあ……この烏合の衆の司令官というのはあ。」

地獄からの使者のような低い、野太い声に、クロムウェル達は怯える。だが、騎士達はすぐにそれらを打ち払い、一斉に男を囲む。

「貴様あ、何者だあ！」

「我らレコン・キスタと知っての事かあ！？」

果敢に挑みかかる騎士達を、男は嘲りの目で見回す。

「…………ふん、貴様らのような烏合の衆にそのような大層な名前、勿体ねえ……。」

斧を持ち上げるような構えを取り、男は高らかに告げる。

「貴様らなど！ その辺の虫けらどもと大して変わらんわあああつ！……！」

「か、かかれえ……！」

一人が合図すると、一斉に騎士達は魔法を放つ。次々に命中して爆発していく魔法に、騎士達は勝利を確信する。クロムウエルも安堵のため息をついた。

「術に頼るか雑魚どもがあつ……！」

「なっ……！」

だが、爆発によって巻き起こった煙の中から、男が怒りの咆哮を上げながら一人に一瞬で接近する。そして男はその騎士の首を掴み、宙高く持ち上げた。

「虫けらがあ……！」

【ズドオンツ……！】

男が騎士を地面に豪快に叩きつけると、騎士は破裂して肉塊へと成り果てて衝撃によって開いた床の大穴の下にある階下へと落下し、砂塵を巻き上げた。

男の掴み技、『デス・アビス』の破壊力を目の当たりにして、騎士

達は怯え、後ずさる。しかし、勇気ある騎士の一人が男の背後に回り込み、杖を振るおうとした。

だが、男はそれすらも許さずに猛然と振り返り、騎士を掴む。

「俺の背後にい、立つんじゃねえつ!!」

「ぎゃああああ!!」

男が豪快に騎士を投げつけ、砲弾と化した騎士に命中した三人の騎士が、部屋の壁をぶち破って発令所の下へと落ち、衝撃によって水風船のように血が飛び出し、絶命した。

「う、わああああああ!!」

「ば、化け物!!」

「助けてくれえええええ!!」

それを見た騎士達は杖を放り捨てて逃げ出そうとする。しかし、男はそんな彼らに絶望という名の贈り物を押し付けた。

「屑があ、消えうせろお!!! 『絶望のシリングフォール』!!」

「!!」

【ズドドドドドッ!!!!】

何もない空間から騎士達の頭上目掛けて大量の巨大な岩石が降り注いでいく、地系中級晶術『シリングフォール』。この術を受けた騎士達は皆、頭を粉碎されるか、下敷きにされて潰されるか。逃げ出そうとした者全員が、息絶えた。

「ひ、ひいいい!!!!??」

ただ一人残されたクロムウエルは、イスから離れ壁に背を付け、必死に逃げ出そうとする。

「さあ……覚悟はできてるかあ虫けらあ？」

凶悪な笑みでクロムウエルを圧倒する男。クロムウエルはガタガタと震えだし、恐怖によって涙と鼻水で顔がグシャグシャになる。

「ひ……………！」

迫る殺意に、クロムウエルは何か打開策はないかと模索する。騎士達は全滅し、助けを呼ぼうにもこの男の前では意味はないだろう。

だが、一つだけ抜け出せる物があった。今自分の指にある指輪が。

「こ、これでもくらえい！！」

「む？」

クロムウエルは指輪が嵌まった右手を突き出し、指輪を男に向ける。すると、指輪から妖しげな紫色の光が部屋を覆いつくしていく。

この光に当てられた者は全てクロムウエルの指揮下に入るのだ。クロムウエルはこの指輪でこの男を支配しようと考えた。

この指輪の魔力から逃れることはできない。そう確信したクロムウエルは笑みを浮かべた。

だが。

「貴様あああああ!!!!!!」

「へ…?」

操られるどころか、凄まじい形相でクロムウエルを睨み付ける男を見て、クロムウエルは素っ頓狂な声を上げる。

クロムウエルは知らなかった。この男の強靱な精神力は肉体の強さと相まって化け物級なこと。そして、男の嫌いな物は、軟弱者と自身の力ではない力に頼った戦い方をする者。

何より、道具アイテムを使うことを何よりも嫌っているということ。

【ガッ!】

「!?!? ぐ、えええ!!!」

瞬時に近寄り、クロムウエルの瘦せた首を男は掴み、持ち上げる。指輪の魔力が効かなかったことにより混乱するクロムウエルは、首を絞められたことよって酸素を求め、あがく。

だが、クロムウエルはもはや助かることはなかった。

「アイテムなぞ…!!!」

【ズドオン!!!】

「使ってんじゃあ…!!!」

身は、トリステイン王家の行く末に絶望し、レコン・キスタへ寝返った裏切り者。

今回は、トリステイン王女直々に下された任務の下、虚無の力を持つているとされる婚約者の少女とその使い魔の少年と共に、ニユーカッスル城へとある書状を届けに来ていた。そしてその時にウエールズを暗殺し、婚約者の少女を奪ってその力を我が物にしようとしていた。

だが予定が大きく変わった。目の前にいる男のせいで。今晚中にも攻め入るはずだった作戦は、この男が兵士を皆殺しにしたおかげで全てパアとなり、知らせを受けたワルドは慌ててロサイスへ戻れば、今の有様だ。

「……貴様あ！！ よくもクロムウエル様を！！」

激昂したワルドは、レイピアの形状をした杖を男に向ける。後ろに控えた大勢の騎士達も手にした杖を男に向けた。

男は、ワルドの立ち振る舞い、雰囲気を見て、ククツと笑い声を上げる。

「……少しは骨のありそうな奴が来たじゃねえか……上等だ。」

斧を持ち上げ、構えを取る男。その身から発せられる圧倒的な殺意のオーラと狂気を纏った笑みに、一部の騎士達は怯む。

だがワルドは怯みもせず、杖を男に向け続けた。

「貴様、どこの手の者だ！！ 王党派か！？ それとも他国の者が！？」

ワルドが叫ぶ。だが男は、嘲笑い一蹴する。

「フハハハッ！ 貴様は俺が誰かに仕えているように見えるのかあ！？ ほざけえ！！ 俺はただ、何もできない軟弱者風情が大軍を率いているのが気に食わないだけよおお……！！」

獰猛な獣の如く目でワルドを睨む男。ワルドは自然と額から流れ落ちる汗を拭うこともせず、男から視界を外そうとしない。

「……理由は、それだけか？」

「ハッ！ それ以外に何があるう？ ……俺が従うのは、俺自身のみよう……。」

男はそこで、ブン！ と斧を振るう。それだけで空気が淀み、場の緊張感を高めるのだ。

「さあ！ 死合つとしよう！！ 俺が勝つか、貴様らが勝つかあ！
！ 殺し合いの中で証明しようじゃねえかあ……！！」

それでお喋りは終いだと言わんばかりに男は叫ぶ。ワルド達は一斉に魔法の詠唱に入った。

ハルケギニアの歴史には、数多くの戦がある。それぞれの領土の奪い合いのような小さな戦から、国同士を巻き込んだ大きな戦まで。そこでは、多くの血が流れ、多くの命が果てた。

だが、その戦においてかならずと行っていい程、ある人物が浮かび上がる。その者の名を知る者は、誰一人としていない。

理由は、その者が名乗らないことと、その人物がその者の名を知る前に事切れていることが多いからである。

一度戦争が起きれば、かならずと言っていい程の確立で現れるそれは、戦場で圧倒的なまでの破壊を撒き散らし、敵味方関係なく、それは等しく均等に殺戮を分け与えられ、後に残るのは草さえ生えないう焼け野原。人間、生物、植物、全ての命を消し、葬り去るその恐ろしいまでの力を、人々は恐れ、畏怖の念を抱いた。

その姿は、人間で描き出されることもあれば悪魔のような姿をしていることもある。時には体格のいい男であったり、女であったり。

また、数多くの仮説も上がっていく。

曰く、強大な魔法を使うメイジである。

曰く、その者はエルフである。

曰く、どこかのメイジが作り上げた魔導兵器である。

曰く、かつて始祖ブリミルが退治し、復活を果たした悪魔である。

曰く、魔王である。

曰く、死神である。

曰く、争いを起こす人間達に罰を下す神の使者である。

様々な説の中、どれも確証を得る物は何一つ無かった。それを調べようにも、その者は戦が終わるとどこかへ消え、また戦が起こると突然現れ破壊を撒き散らし、また消える。

神出鬼没とは、このことである。

その存在の噂はハルケギニアの国々にまで行き渡り、遙か東方にまで響いたという。幾多の指導者達は「何をバカな」と信じなかったが、戦を起こすとその姿をこの世に見せることは二度と無かった。いつしかハルケギニア中で、『戦を起こすとかならず死ぬ』という決まりが出来上がっていく。そして、王族の間や指導者達の間では、その者を数多くある中でもっともピツタリな名を畏怖を込めてこう呼んだ。

『最凶の破壊神』と。

だが、歴史には裏がある。語られることのない裏の話。

戦によって一番苦しむのは民である。戦のために我が子を泣く泣く送り出し、敵国に物を奪われ、罪もないのに殺されていく。

誰もが、戦争を憎み、嫌い、避けたがった。だが力無き彼らに決定権はない。全ては戦争を起こす者達にしか判断することを許されない。

そこへ、その者が戦の度に現れ、破壊を撒き散らし、戦を強制的に
終結へと導く。終わり方はどうであれ、人々はそれで救われていっ
た。

戦場に出る前に戦争が終わり、家族の下へ帰ることができた兵士が
いた。

敵兵に貞操を奪われかけるも、その者によって救われた女がいた。

愛する者との別れを覚悟したが、救われた己の命を喜んだ王子がい
た。

死んだと思っていた愛する人が、生き残ったと聞いて涙する王女が
いた。

殿を務めて軍勢に立ち向かい、死に掛けるも救われた少年がいた。

自らの代わりに戦場に赴いた最愛の少年と、再会を果たせた少女が
いた。

そして、彼の名を知る唯一の者達がいた。

それはその者が意図してやったことなのか、それとも単なる気まぐれか。はたまた偶然が生み出した産物か………それを知るのは、その者のみ。

だが人々は、その者は一体誰なのか？ と聞かれれば、口を揃えてこう答えるだろう。全てを破壊する力を持つその者を、畏怖だけでなく、感謝を、尊敬を込めて呼ぶ。

『最強の英雄』と。

「俺の本能が叫ぶのさ！！ 貴様らを、殺せとおおおおおお！！！！！！！！！！」

その者の名は、バルバトス・ゲーティア……『英雄』の力を持つていながら、『英雄』と称えられることなく果て、とある世界で『英雄』と影で呼ばれた男。

彼は今日も、その力をもって破壊を撒き散らし、命を刈り取っている。
全ては、己が誓った一人の少年に、復讐を果たすその日まで。

）THE END（

< 5 > (後書き)

終わりました。初めての二次創作、どうでしたか？ 楽しめました？ バルバトスキヤラ違いました？ え、やっぱ違って？ マジすいません。でも個人的にこんな人だったらいいなという願望がいたいたいやめて止めてやめて。

で、この小説を書き始めた動機というのが……

息抜きです。

いや活動報告には違うタイトルあつたんですけどね？ たまには二次小説でも書いてみようかなーって思いましたーはははー あ、ちゃんと本編も進めてますよ？ 大丈夫です。

あとついでに、この小説、実は短編にするつもりだったんですが、明らかに文字数多すぎて無理でしたので、五部構成という形に。詰め込みすぎた……。

では、これにて。個人的バルバトス人物像を載せたココロコロでした！

最後に皆様！ ぶるああああああああああああああ！！！！！！！！

貴様らはあ、俺の最高のオモチヤだったぜえ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7464k/>

最強の英雄、ハルケギニアの大地に立つ

2011年11月16日14時23分発行